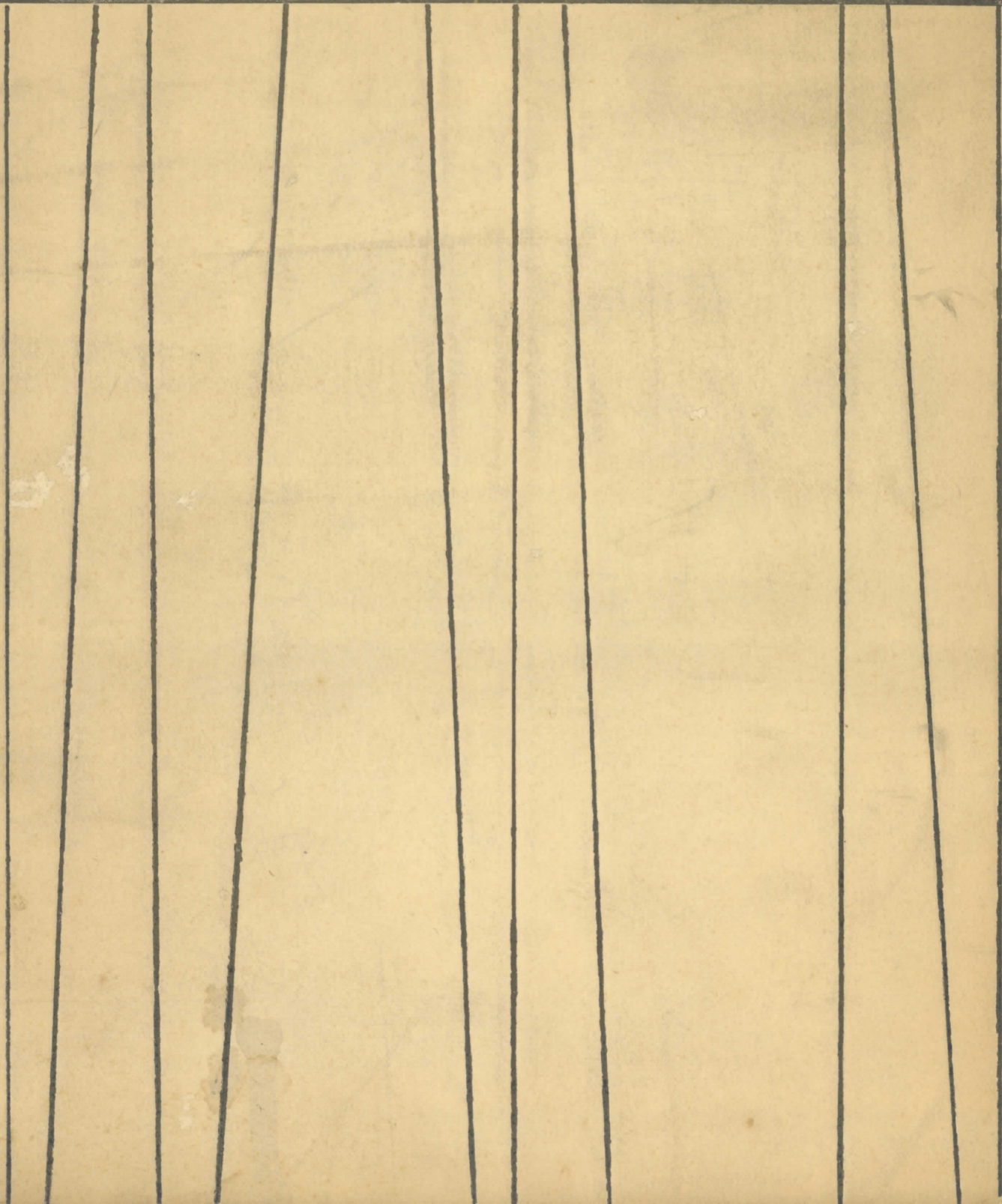
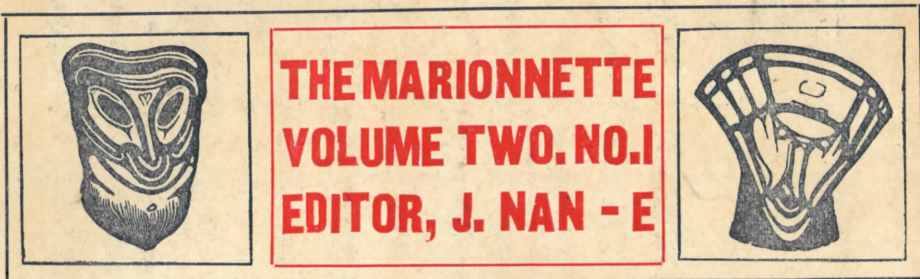


MARIONNETTE





マンチエスタアの方舟劇場 [Ark Theatre] の演出に依る『聖母劇』
昨年の秋ベルギーのリエージュ市に催された、新興人形劇場の国際的聯合
集會に紹介されたもの。尙この人形製作者は フランシス ノーリスである。



J'AIME LES MARIONNETTES ANATOLE FRANCE

J'en ai de'ja fait l'aveu : j'aime les marionnettes, et celles de M. Signoret me plaisent singulierement. Ce sont des artistes qui les taillent; ce sont des poetes qui les montrent. Elles ont une grace naive, une gaucherie divine de statues qui consentent a faire les poupees, et l'on est ravi de voir ces petites idoles jouer la comedie. Considerez encore qu'elles furent faites pour ce qu'elles font, que leur nature est conforme a leur destinee, qu'elles sont parfaites sans effort.

J'ai vu, certain soir, sur un grand theatre, une dame de beaucoup de talent et tout a fait respectable qui, habillee en reine et recitant des vers, voulait se faire passer pour la sceur d'Helene et des celestes Cemeaux. Mais elle a le nez camard, et j'ai connu tout de suite a ce signe qu'elle n'etait pas la fille de Leda. C'est pourquoi elle avait beau faire, je ne la croyais pas. Tout mon plaisir etait gate. Avec les marionnettes, on n'a jamais a craindre un semblable malaise. Elles sont faites a l'image des filles du reve. Et puis elles ont mille autres que je ne saurais exprimer tant elles sont subtiles, mais que je goute avec delices. Tenez, ce que je vais dire est a peu pres inintelligible; je le dirai tout de meme parce que cela repond a une sensation vraie.

Ces marionnettes ressemblent a des hieroglyphes egyptiens, c'est-a-dire a quelques chose de mysterieux et de pur, et, quand elles representent un drame de Shakespeare ou d'Aristophane, je crois voir la pensee du poete se derouler en caracteres sur les maraillies d'un temple. Enfin, je veneration leur divine innocence et je suis bien sur que, si le vieil Eschyle, qui etait tres mystique, revenait sur la terre et visitait la France a l'occasion de notre Exposition universelle, il ferait jouer ses tragedes par la troupe de M. Signoret.

偶人劇私説

黄 眠 瞳 人

一
明治四十四年もしくは大正元年の頃なりき。當時、予の志は詩の上にあるごとくもに、また劇部の上、批評の上にある。

劇部に對する情熱は、遠く化政度の昔よりわが故郷信州飯田が、歌舞伎子等の書入れどころなりし頃より郷里に鬱迫する雰圍氣と、わが固有の芝居好きの性癖とに倚るもの也。先年同僚故黒木勘藏君が白猿子等の古衣装道具等を發見せるはわが親族の家よりなるを見ても、當時如何ばかり演劇熱ありしかはほぼ予のみに想像し得らるゝ也。

予の拙劣なる戯曲は、美に就ての三部曲の一なる「美の遍路」とよぶ道成寺に取材せる、ショルツ、ホオフマンスタアル張りの一篇と今一つは標題も既に忘失せる千姫に取材せる一篇との二篇のみにして、評家楠山正雄君よりこの脚本には舞臺が一町も要ると言はれし前者と、島村抱月氏より舞臺技法上の懇切なる評言を受けし後者ととなるが、前者は雑誌「假面」の前身「聖盃」に掲げ、後者は草稿のまゝに佚亡し去りしと記憶す。

かく作劇に失敗せる頃より、予の頭腦に磅礴せる意匠は、生身の優人を用ふる浪漫劇に非ず、(作劇青年が初めて舞臺上に俳優を動かす事の快感は、何人も一度は夢想するものにて、一面この衝動なかりしにはあらねど)むしろ偶人を用ひてそのギクシヤクせる身振の間、自ら湧出する不可言の劇的浪漫世界の創造といふ事なり。

森鷗外氏が「一幕物」一卷に於て提示せる近代歐洲劇の見本は、後出の日本近代劇の母胎となりしものなるが、「負けたる人」といひ「猛者」といひ「我君」といふが如き一幕物が本來優人よりも偶人のために作られたる好模型なるに係らず、その影響は遂にわが劇部に具體化せられざるを憾み、わが黨同趣味の士會するや、しばしば西洋偶人劇の輸入を想望するの熱意太だ強きものありき。結城孫三郎を招じ、淺草奥山のお伽人形劇を見物せしなど、當年の儂なき偶人劇イチスの一端に外ならず。

その後、某富豪の家に維納偶人若干の輸入を見たりと説を傳ふるものありしが、遂に何等の建設を見ず、同僚河竹繁俊君に會するや恒に偶人劇の勃興を提説せしかど、彼亦他の施設に繁忙のため今以てその進展を見ず、たましく演劇を専門に研究して大陸より歸來せる知人に逢ひて、その偶人劇に關する聞見を問へど、概して熱意少く、多少ありても予とその方向を異にするため遂にわが幻夢の實現するなきを悲む也。

三

予は偶人によりて抒情詩の對話的効果をあげ、偶人によりてのみ可能なる一種不可言の驚異世界を舞臺上に實現せしめむと夢想す。

ブラウニング等の昔試みし劇詩はその使命の一半を果せるものにて、シュニッツレル一派の作出せる近代

劇はその使命の他の一半を實現せるもの也。「プロミシヤス解縛」は勿論そのまゝに上演する事不可能なれどシエリの劇部による形式上の熱意は今日なほわれらの汲みとりうる所のもの也。シエリが「チェンチ一家」、コオリッチが「ピッコロミイニ」、「ワルレンシュタインの死」、「ザボリヤ」、「ロベスピエール滅亡」、「オゾリオ」等は、ブラウニングの「ストラップフォード」、「ピバ過ぎゆく」、「バラセルス」等、「バルコニにて」は巧拙は暫く措きて上演不可能にはあらねど、諸劇詩と大體引くるめて、ベドオスの「新妻悲曲」、「死の洒落草紙」、「トリスモンド」等とともに詩的希求を劇的形式の上に實現して、對話と人物出入とによる展開と建設との意義を別種の世界に於て果したるものなりき。

四

されども、われ等の欲求するは、偶人がその動作の微妙なる超自然的、純客觀的、走行困難的魅力を以て、別個のセリフの發聲と呼應し、生身の優人等のウゴキには俟つべからざる獨自の浪漫世界を打ち建て、思ふ存分に傍若無人的なる獨自の抒情的進行を助け、又抒情對話の句法の妙味がその詩語の微妙なる超自然的、純主規的、傍若無人的魅力を以て、別個の偶人の動作と呼應し、生身の優人等のセリフマワシには俟つべからざる獨自の浪漫世界を打ち建て、思ふ存分にバラシシス的な科しの形式劇的進行を助け、この兩者相より相まつて生ずる偶人劇の効果也。詩歌と偶人と脚燈との渾然たる一致也。靜謐なる思念世界の劇的實現也。

(畢)

ダーク繰り人形印象記

萩原 朔太郎

英國人ダーク一座

西洋あやつり人形芝居

自夜七時 於當地

柳座劇場

冬近い郷里の町の四辻で、僕がこの珍しい廣告を見たのは、小學校に通つてゐる幼年の時のことであつた。性來夢想家で、エキゾチックな憧憬を多分に持つてゐた僕は、西洋あやつりといふ不思議な名前、英國人ダークといふ異國趣味の名前につられて、譯もわからずその劇場へ走つて行つた。もとより幼年の時の事であり、遠い昔の色あせた記憶であるから、今日その印象を書き綴るべく、あまりに漠然とした夢の忘失を感じてゐる。しかしながら一面からは、子供の時の印象ほど、却つて強く忘れがたいものはないのである。當時この繰り人形を見た人は、おそらく僕の外にも多いであらう。以下自分の語るところに、もし記憶の誤があ

るならば——そして勿論あると思ふ——他の人々のより、健全な記憶によつて、幸ひ訂正していただきたく、あへてこの印象を書く次第である。

英國人ダーク

開場を知らせる鈴べんにつれて、舞臺に一人の外國人が現はれて來た。白髮童顔の老人であり、古風なフロックコートを着てゐる。僕等は一見して、それがダークであることを直感した。如何にも「童話のお叔父さん」と言つた感じがする、上品で人懐かしい風貌の老人だつた。彼は觀客に一揖した後、何か英語でベラベラとしやべり始めた。側に日本人の通譯が居て、次のやうな意味の取りつぎをした。

「滿場の紳士淑女諸君。私が當一座の座長ダークであります。これより御覽に供しまする西洋あやつり人形は、我が本國イギリスに於ては勿論、獨逸、佛蘭西その他歐洲大陸に於きましても、至るところ多大の喝采を博して居ります次第。今度世界を漫遊致しますついでを於て、昨年日本國に立ち寄り、東京諸方の劇場にて公演致しましたところ、悉く觀客諸君の御意に適ひ、至るところ多大の御喝采を博し居る次第であります。御當地は始めて御見得なれば、とりわけ熱演を以て御高覽に供すべく、ひとへに御評判を願ひ奉る次第であります。云々。」

かうした口上を述べてる間に、背後うしろの黒幕の間から、小さな人形が幾度も顔を出して覗きに來る。中には小道具の椅子など運んで來て、舞臺にまだ人間が居るのを見、吃驚して樂屋に逃げ込む奴なども居る。なかなかユーモラスで愛嬌がある。

第一幕

深夜の街の光景である。背景には都會の家々が眠つて居り、高層建築の窓々には、赤や青の灯がついている。所々に寺院の圓塔ドームがあつて、空に大きな月が出て居る。

靜かにピアノの音が聽える。曲は眠たげなメロヂイを奏して居る。

暫らくして一人の醉漢が現れて來る。繼ぎ足（西洋竹馬）をしてゐるので、足ばかり長く見える。兩手に酒の瓶をもち、ラツバ飲みをして舞臺をよろけ歩いて居る。それから眠たげな聲を出し、奇妙な調子で歌を唄ふ。（歌はもちろん英語であり、天井でダークが唄つて居るのである。）

醉漢の様子が、だんだん狂的になつてくる。ピアノの音樂も烈しくなり、唄も亂暴でグロテスクになつてくる。

醉漢が酒瓶を投げ始める。家の屋根へ向つて、窓へ向つて、街路へ向つて、並木へ向つて、やたらむやみに何でも構はず投げつける。酒瓶はポケットやズボンの中から、何本も取り出される。正に酒精中毒の妄想狂亂といふ感じである。

最後に一本の瓶を取り出し、空の月を目掛けて投げつける。命中！ 月が壊れて地上に落ち、舞臺に碎けた破片が散る。ガラガラといふ凄まじい大きな響。（幕）

（この仕掛は、月の所が幕の穴になつて居るのである。酒瓶がその穴に這入ると同時に、幕が落ちて月が見えなくなつてしまふ。舞臺に散る月の破片は、もちろん天井から投げ出すのである。）

第二幕

田園の春の景色である。背景には牧場があり、色々な花が咲き、地に若草が崩えてゐる。

右手に教會があり、オルガンの音が聽える。肥つた田舎の老婆が一人、手に大きな聖書を抱へ、杖を突いてよぼよぼと歩いて来る。田舎の春。麗らかな日曜日朝の朝なのだろう。

老婆が讚美歌を唄ふ。それが次第に田舎の踊り唄に變つて來、杖で拍子を取りながら腰をふる。すると腰のスカートから、小さい豆粒ほどの子供が跳び出し、舞臺をちよこちよここと踊り廻る。

老婆は相かはらず腰をふり、杖で地面を突きながら拍子を取つて居る。第二番目の子供が跳び出して來る。それから第三番目、第四番目と、限もなく續々と現はれて來る。皆豆粒程の小供であり、漸く小指ぐらひしかない。それが幾人もなく無數に跳び出し、老婆の杖の調子につれて、舞臺をピヨピヨピヨを踊り廻る。(幕)

(この幕の印象は、田舎の平和な春を聯想させる。信心深い農家の老婆が、幾人ともなく子供を生んで、平和な生活をして居る所を、童話的な形式によつて表象したものである。前の醉漢の出る幻想的な舞台と共に、たいへん詩味の深い舞台であり、牧歌風のなつかしい印象を強く受けた。)

間幕

ダークが再び舞臺に出て來る。そして今迄のは餘興であり、これからいよいよ本筋の面白い芝居に這入ると言ふ。劇の題はチャリツプ、トリツプといふ二人の盗人の一代記で、滑稽百出、最も奇抜で面白いものと言ふ。この説明の間も、前の如く背後の幕の隙間から、人形が幾度も顔を出して覗きに來る。中にはそつと拳骨をふり廻し、ダークに早く引ッこめといふ身振りを示しながら、急いで逃げ込んでしまふ人形もある。

(以下數幕あつたやうだが、自分の記憶に残つてゐるのは二幕しかない。よつて二幕だけ書くことにする。幕の順序は不明である。)

第 二 幕

市街の或る一角である。舞臺右手に理髮店があり、赤と青で塗つた棒看板が、家根の横から往來の方に突き出して居る。反對の側の舞臺から、二人の變テコな人物が歩いて居る。これがチャリツブとトリツブであることは、劇の進行によつてすぐに解つた。

二人は何か耳打ちをする。それから忍び足をして、そつと理髮店の窓に近づいて来る。すると看板の飴ん棒が、人間の腕のやうに動いて、窓に手をかけた奴の頭を殴りつける。も一人の奴が忍んで来る。これもまた殴られる。

チャリツブとトリツブが喧嘩を始める。互に自分を殴つた奴を、對手だと思ひちがへてゐるからである。馬鹿々々しい喧嘩。亂暴な掴み合ひ。滑稽。愚劣。ナンセンス。日茶苦茶騒ぎ。

喧嘩してゐる二人の頭を、棒がまた慘酷に殴りつける。とても痛さうな音がする。カチン！ コチン！ カチン！

そこで二人は和解し、協同の敵である棒に向つて掛つてくる。風車に突撃するドンキホーテのやうな工合に。

棒と人間との大戦争！ 勇壯悲絶。言語同斷。デタラメ大騒動！

人間が遂に勝利を得る。そして二人の盗人は、窓から家の中へ這入つてしまふ。舞臺しばらく空虚。

急にけたたましい聲が起る。家の中から女が逃げ出して來たのである。續いて二人の盗人が追ひかけてくる。

女は寢衣をきてゐる。盗人がそれを脱がさうとする。女の悲鳴！

二人の盗人が、遂に女の寢衣を奪つてしまふ。それから尙下着も奪つてしまふ。女の悲鳴！

裸の女と、追ひ廻す二人の男と。慘酷。猥褻。グロテスク。大混亂！

巡査がやつて來る。英國の巡査。ヘルメット帽を被り、大きな棍棒を持つてゐる。

巡査と盗人との立ち廻り。馬鹿と間抜けの競技會。頭の上に足が立つたり、脊中から手が出たりする。(幕)

第 四 幕

田舎の旅館。舞臺左寄りに寢臺ベットがある。此所へ前幕の盗人の一人が來る。すぐ衣服を脱ぎ、寢衣にかへて寢臺ベットに眠る。

夜が次第に更けて行く。時計が十二時をうつ。どこからとなく物凄い響が聽える。燈火が自然に暗くなり、陰氣な影が壁に映る。化物屋敷である。

部屋の四方の隅々から、無数の鼠が現はれて來る。そして盗人の寢てゐるベットの上へ、續々として登つて來る。ベットの脚を、後から後から這ひあがつて、黒い紐のやうに無氣味な列を作つてゐる。

寢てゐる男が目を醒す。びつくりして悲鳴をあげ、一尺も高く寢臺の上に跳びあがる。瞬間！ 鼠はすつ

かり消えてしまふ。

男は安心して横になり、また眠入つてしまふ。舞臺はしばらく空虚。

再度また隅々から、影のやうに鼠の一隊が現はれて来る。そしてまた前のやうに、寢臺の脚にそつと這ひ登る。黒い、長い、氣味の悪い鼠の紐！

寢臺の男が目を醒す。跳びあがる。鼠が一齊に消えてしまふ。

男が安心して眠る。また鼠が現はれて来る。反覆。

男は神経過敏になつてしまふ。恐怖によつてビクビクし、鼠が現はれても來ないのに、幾度も枕から頭をあげ、驚いて跳びあがつたりする。(その度に見物が笑ふ。)

しかし仕舞に疲れてしまふ。そして何時かまた眠つてしまふ。

窓が自然に開閉する。天井で怪しい物音がする。

青白い燐火が燃え、部屋の内を往復する。

椅子がガタゴト動き出す。

寢臺の上の天井から、女の長い髪が垂れさがつて来る。それが丁度、寢てゐる男の顔に觸る。

男が魘うなされる。苦しげな呻うなき聲！

青白い燐火が、さかんに部屋の中を往復する。

幽霊が現はれる。髪の毛をふり亂して、身體が空中に浮いてゐる。日本の怪談に出るそれと同じく、足が人魂のやうに尾を曳いてゐる。女である。

寢臺の男が目を醒す。すぐ目の前に幽霊が居る。跳び起きて逃げやうとする。しかし幽霊が上に乗つてゐる。

起きあがれてない。苦悶！ 絶叫！ 斷末魔の大反轉！

巡査が突入して来る。男の悲鳴を聽いて來たのである。

幽霊が消える。男は巡査を見て逃げやうとする。幽霊がまた出て押へつける。

悪漢遂に捕縛される。 (終幕)

後記。

その後少したつてから東京に行き、淺草花屋敷でダーク線り人形の看板を見た。前の面白かつた印象が忘れないので、再度見物席に入ったけれども、前に田舎の劇場で見た時とは、萬事様子がちがつて面白くなかつた。後に聞けば、當時既にダークは本國に歸つてしまひ、その技術を學んだ日本人が、ダーク線りの名で演じてゐるのだと言ふことだつた。それは藝も下手であつたし、ユーモアやグロテスクの氣分がなく、妙に眞面目くさつて詰らない演出だつた。

編輯者後記

淺草花屋では今も線人形を上演してゐる。萩原氏の後記の通り、ダーク當時とは上品化してゐて、やゝ中途半端の感をまぬがれないが、ダークの得意の出し物の一つだつた骸骨踊などは今見てもなか／＼面白い。これはアメリカのトニー、サアグ一座でもやつてゐるが、起原は伊太利のシシリー島に今も遺つて居るものからだらうと筆者は思惟してゐる。

パンチとチユデイ

世界中のお小さい方々のごなたにも
お馴染の深い有名な人形劇

— 作者不明 —

本田 満津 二 譯

登場人物

パンチ。デユデイ。ジム。醫者。デ
ヨオンズ。役人。巡査。絞刑吏。幽
霊。トビー。袋鼠の仔。

.....
挿畫.....クルイクシヤンク



パンチ (幕の上からひよつくり顔を出す。)

やあ、坊ちやん、嬢ちやん、みなさん来てゐますね。わたくしは、こゝでちやんと見てゐたんですよ。みなさん、よくいらつしやいました。やあ、みなさんぶりぶり肥えて、お丈も高くなりましたね。ちよつと待つて下さい。いま、長靴をはいて、それから、みなさんのお相手をいたしますからね。(叫子)

わたしは、それは、それはお人好し。

脊中にしよつてるすてきな瘤を、

お荷物なごとは勿體ない。

それに、この鼻、ああ美しいこと。

それに、それぞれのおべと、

何て可愛い、きれいなおべと。

みなさんごらん、この棒切は、

ばかり、ばかり、ぼつかりと、

片つぱしから相手を倒す、

大事な、大事な得物でござる。

(ひよつくり舞臺へ飛び出す。)

やあ、みなさん、よくいらつしやいました。わたしくは、今朝は、とても上々吉の御機嫌なんです。何

しろ、寢床を出る時、足の方から先にするりと床へ降りた位ですからね。

(舞臺を踊り廻つて又唄ひ出す。)

踊れ、踊れ、ポルカを踊れ。

わたしのポルカを御ろうじろ。

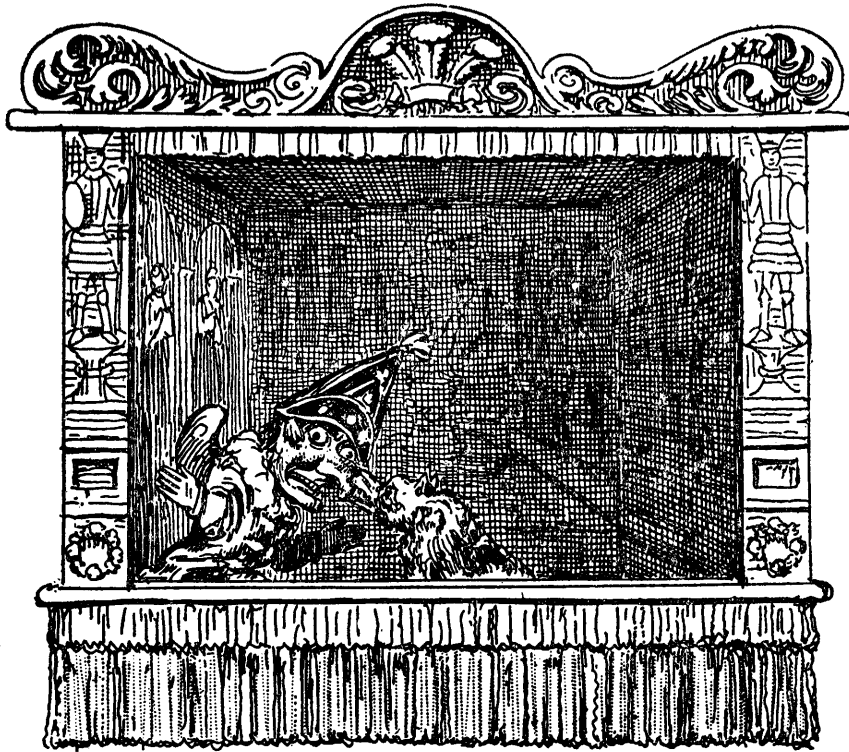
(舞臺、床下へ聲をかける。) デユデイ、デユデイ。おうい、デユデイ、デユデイ、デユデイ、デユデイ。早くこい。

デユデイ (ひよいと舞臺へ飛び上る。)

まあ、せわしないこと。パンチさん、何の御用。あたし、とても、とても忙しいのよ。少し待つてゐて下さらない。まあ、あたし何から先に手を附けたらいゝんでせう。わからなくなつてしまつたわ。あれも、これも、これも、あれも、みんな何より先にしてしまわなければならないのよ。ね、何の御用。おゝ忙しこと。

パンチ なに、別に用つて程の事はないんだがね。お前もしかしたら、他所ゆきの、新らしい、きれいな絹の着物でもほしかないだらうかと思つたものだからね。あ、なに、忙しいんならごうでもいゝさ。又何時かにしやう。來年でもいゝんだよ。

デユデイ (嬌態を作つて、パンチにすり寄り) ねえ、パンチイ、ウンチイ、あたしの可愛いゝ、可愛いゝ大事なパンチさん。あたし、そんなに、とても忙しいといふ譯でもないのよ。連れていつてさ。さあ、たつたいま。



パンチ トビイ、トビイ、こつちだ、こつちだ。

ほら、猫だ！

鼠だ！

追かける、捕へる、

うしツ、うしツ。

トビイ わう、わう、わう。

パンチ トビイ、トビイ、トビイヤ。

お手だ、お手だ。よし、よし、さあ握手だ。

む、いゝ子だ、お前はおとなしいゝ犬だね

.....

おやゝ、可愛い笑顔ぢやないか、すてきだね

.....

あ、痛い、痛い。

俺の鼻を、俺の大事な、他所ゆきの鼻を。

たった一つの大事な鼻を.....

パンチ さうかい。それもよからう。仕方がないさ、たつたいまより早く行けないんなら。だが出かける前に、可愛いキッスを一つしておくれ。

(二人は、溶け込むやうに抱き合つたまま、足をびよくびよく踊り出す。)

ヂュデイ あ、あたし、いま坊やに他所ゆきを着せて來ますわ。

パンチ あ、それから、トビイにも、新しい首輪をさせてやつておくれ、忘れないでね。

(小犬のトビイが吠える。)

パンチ トビイ、トビイ。こつちだ、こつちだ。ほら、猫だ、鼠だ。追かけろ。うし、捕へろ、うしッ、うしッ、うしッ！

トビイ わう、わう、わう。

パンチ トビイ、トビイ。トビイや、お手だ、お手だ。よし、よし、さあ握手だ。む、いゝ子だ。お前はおとなしい、犬だね。(トビイは、うーと唸る。) おやおや、可愛い、笑顔ぢやないか、すてきだね。(トビイはパ

ンチの曲つた鼻の先に食ひ附く。) あ、痛い、痛い、俺の鼻を。俺の大事な、他所ゆきの鼻を。たつた一つの大
事な鼻を。

(ジム・クロウ『譯者註』黒ん坊の通稱』登場する。)

ジム いやあ、これは、これは。ごうでがす。パンチの旦那。ごうでがすな。今朝の御機嫌は。

パンチ いやあ、これは、これは、ちん縮毛の親方。ごうでがしたな、來年のこの前の土曜日の御機嫌は。

おい、お前何だつて顔を洗つて來ないんだ。俺はお前を煙突屋かと思つたよ。

ジム 何つてやんでえ。餘計なお世話だ。この釣鼻の、蝦鼻野郎め。

パンチ な、なんだと、頓痴氣野郎のへちやもくれめ。よくもよくも、俺様のこの美しい鼻の悪口なんかいひやがつたな。やい、かうしてやるぞ。(捧切で、いやといふ程ジムの頭を殴る。)

ジム む、今日は、見のがしておいてやらう。また来るよ。(パンチは又かゝつて行つたが今度は外す。ジムは唄ふ。)

ぐるぐる舞へ、ぐるぐる舞へ、

ぐるぐる舞へ、ぐるぐる舞へ。

こちらは廻つて、飛び退いて、

巧に外す、ジム・クロウ。

(パンチは續けさまに打つてかゝるが、みんな外れる。パンチはよろよろとジムに打ちかゝりながら、二人とも退場。パンチ引返して驢馬に乗つて出て来る。)

パンチ はい、はい、さあ歩いた、歩いた。さあ、もう二厘やるぞ、酒代だ酒代だ。おい、歩いた歩いた。

(驢馬は棒立ちになつてパンチを振り落す。)

や、殺された。もう死んだ。死んだ。醫者だ、醫者だ。

(醫者登場。)

醫者 やあ、パンチさんでしたね。これは、これは、どうしたといふんです。さあさあ、お脈を拜見いたしますから、おあんどお口を開いて。

パンチ ああ、もう死んだ。

醫者 いや、いや、まだ、そこまでは往つてゐないやうです。さあ、今度は舌を拜見いたしますから手をお出しになつて。

パンチ いや、もう死んだ。石のやうに死んでしまつた。身體中の骨が一本残らず折れてしまつたんだ。もう動けない。(さう云ひながら醫者の眼のあたりを蹴る。)

醫者 へえ、さうでせうかね。息を御引取りになつてから、どの位になりますか。

パンチ もう三週間になるんだ。

醫者 すると、いつお亡くなりになつた事になりますかね。

パンチ 三十分ばかり前だ。抛げ殺されたんだ。生かしてくれ。生かしてくれ。

醫者 ほほう。では、お薬をさしあげませう。仲々得難い大妙薬ですぞ。(棒を拾ひあげる。)服用前によく振り混ぜること。(パンチを左右に激しく振つた上がんと脳天をなぐる。)

パンチ 一回一服でいゝんでせう、先生。いや、ごうも眼の廻る強い薬だ。

醫者 いや、いや、まだ癒りません。ほうら、もの一服、もう一服、もう一服。(度ごとパンチを蹴る。)

パンチ 飲んだ。飲んだ。確かに飲んだ。さあ、薬禮を拂つてやるぞ。(棒を奪ひ取つて、醫者を蹴り倒す。)ごうだ。

ふん、醫者の拂はかうしてやるに限るよ。ざまあ見ろ。(大きな聲だ。)ヂユデイや、ヂユデイや、坊やはここにゐるんだい。

ヂユデイ あ、坊やはこゝにゐますよ。パンチイおとうちん、ほら、可愛い、坊やが。ほんのちよつとの間

坊やお守をして下さらない。あたし、ちよいとそこまで行つて來ますから。

(チユデイ退場する。)

パンチ (赤ん坊を抱いて唄ひ出す。)

これこれ静かにおしなさい、

ねんねの坊やが目醒す。

可愛い坊主め。こら、坊主め。何て可愛い坊主だらう。(赤ん坊はむづかり出す。) おゝ、泣くんぢやない泣くんぢやない。泣くんぢやないつたら。こら、泣くんぢやないといふのに。三文人形め。(又唄ひ出す。)

ねんねはいゝ子だお泣きやるな。

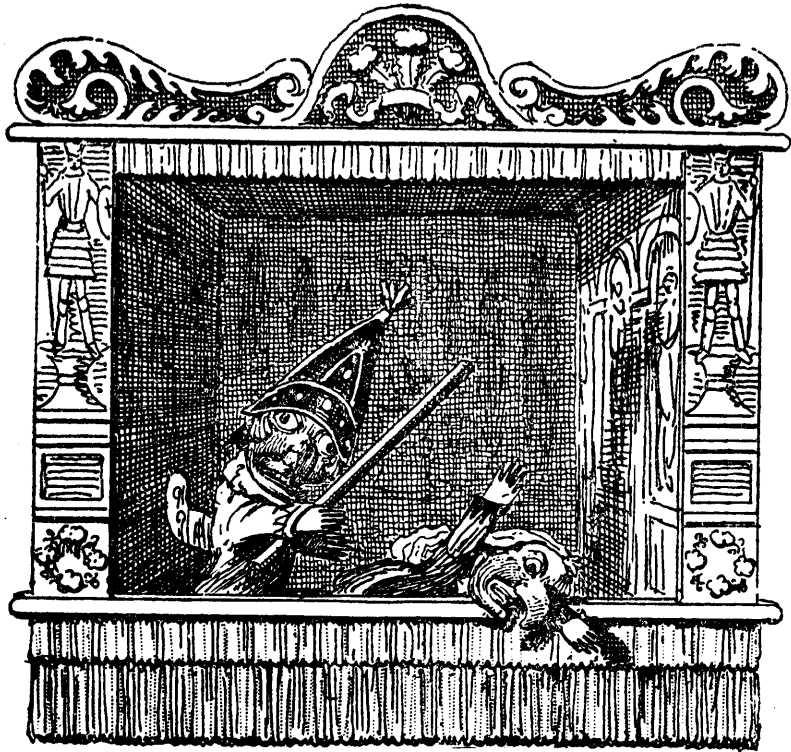
(赤ん坊は、わあと泣き出す。) えい、うるせえな。それ、お母あんどこへ行ちまへ。(赤ん坊を窓から外へ放り投げる。)

チユデイが歸つて來る。)

チユデイ おや、坊やは。坊やは何處へいつたんですの。坊や。可愛い坊や。

パチン おや、お前拾はなかつたかい。をかしいなあ。俺は、確かにお前の頭の上へ投げてやつた筈だがな

あ。



チユデイ まあ、坊やを、坊やを、まあ

この釣鼻の、

背むしの、

どんぐり眼の、

瘤々の松の木脚の悪黨！

これでも喰へ、

これでも、これも、

これでも喰へ！

パンチ ほら、今度はお前だ。

少し分け前をやるぞ、

ヂユデイ まあ、坊やを。まあ。この釣鼻の、呑むしの、ごんぐり眼の、瘤々の松の木脚の悪黨。これでも

喰へ、これでも、これでも、これでも喰へ、(棒で殴る。)

パンチ (棒を奪って。) ほら、今度はお前だ。少し分け前をやるぞ。(ヂユデイを殴り殺す。鰐が口を開いて出て来る。)

パンチ やあ、これは大變なむし齒だ。そんな大きな口をしてゐちや手も附けられねえや。(棒を喉の中へ放り込む。) ああれ、楊子を呑み込んでしまひやがつたぞ。(呟ふ。) リイ、トウラア、ルウラア、リイデエイ。

(袋鼠の仔が出て来る。)

袋鼠の仔 (舞臺の隅つこから首だけ出して又直ぐ引込める。) トウラア、ルウラア、リイデエイ。

パンチ ごなたか何か仰いましたかい。(ぐるぐる見廻してゐたが又呟ふ。) フォルデロオル、トウデロオル、フォル

デロオルデイ。

袋鼠の仔 なに、風の音ですよ。フォルデロオル、トウデロオル。パンチイ、パンチイ。

パンチ (ぐるぐる見廻してゐたが、隅つこの袋鼠の仔を見附ける。) 可愛い、小鳥のやうな聲で呼んでいらつしやるのは

ごなたですか。(袋鼠の仔はヂユデイの屍體を持って出て来て、パンチの鼻の先へつきつける。)

袋鼠の仔 パンチやあー

パンチ おや、お前は、どつくの昔に片付けてやつた筈ぢやねえか。(又ヂユデイを張り倒す。袋鼠の仔は、今度け醫者

の屍體を持って来てパンチの鼻の先へつきつける。)

袋鼠の仔 パンチやあー

パンチ あれ、先生、又藥代の取立ですか。(屍體をつき飛ばす。ヂユデイと醫者の屍體の間に立つてゐる袋鼠の仔を見附ける。)

ぢや、おや、君か。(殿らうとするが、袋鼠の仔はひらりと體をかはして避ける。)や、握手だ。君には指でも一本觸れやしないよ。(狙つておいてばかりとやつたが、美事に外れる。)ほうらね。觸らないだらう。ほら、當らないだらう。

袋鼠の仔 當らないね。

パンチ ほら、これも當らない。これも、これも。(いくら狙つても外れる。)

袋鼠の仔 ちつとも當らないね。痛くもかゆくもないや。

パンチ ぢや、これはどうだ。(又外れる。)

袋鼠の仔 一生懸命にやつたやつた。暖簾と腕押しだね。手ごたいがないんぢや。

パンチ やれやれ、いくらやつても駄目だ。(又狙ひ打ちをやつたが、外れて、田合がしらに恰度そこへぽいと飛び出して來た

チヨオンズの頭を打つ。)

チヨオンズ (打たれた頭をさすりながら。) いや、有難いことで。わたしは何といふ合せな男でせう。犬も歩け

ば棒に當るといふのはわたしの事をいつたものに違ひない。さうさう、犬といへば、パンチさん、わたしのトビイはごこにゐますかな。

パンチ トビイといふと、どんな犬でしたかね。胴の片方に尾があつて、もう片方に首の附いてゐる、小さい犬ですか。

チヨオンズ さうです。さうです。

パンチ うむ、それぢやあれは俺の犬だ。

ヂョオンズ 飛んでもない。あれはわたしの犬です。

パンチ 何、お前の犬だ。飛んでもない事をいふ奴だ。さあ、誰の犬だか、腕づくで極めやう。

ヂョオンズ ようがせう。お互に卑怯な真似はしない事です。頭を殴つたり、脾腹を打つたりしつこなし
ですよ。脚の指を踏み附けたりしちやいけないんですよ。

パンチ よかろう。さあ来い。(ヂョオンズの鼻をいやといふ程突く。)

ヂョオンズ あれはいけない。犯則だ。(トビイを呼ぶ。) トビイ、トビイ、トビイ。大變だ、早く来てくれ。お

前の主人の一大事だ。(大喧嘩になる。)

(教區の小役人が出て来る。)

役人 おいこら、おい、おい。何をしちよるか。騒がしいぞ。止めろ。止めないか。おい。

パンチ おいこら、おい、おい、何だ、又一人來やがつたな。

役人 おいこら、本官を誰と心得ちよるか。ああん。

パンチ 何、てめえか、てめえは、お寺の張番をするこつば役人だ。掃除人夫だ。坊主の用心棒だ。それが
如何したつてんだ。かう見えても俺も同職だぞ。

役人 何だと、貴様が役人だと。よろし、辭令を出して見せろ、辭令を。

パンチ そうら辭令だ。よく見とけ。(棒で役人の頭を殴る。)

役人 こいつが、こいつが、本官を打ちをつたな。もう許さんぞ。(二人の喧嘩になる。)

そうら、一つだ。

パンチ ようし、二つ目だ。

役人 そうら、もう一つだ。

パンチ そこで今度は、軽い奴を一つだ。

役人 やあ、耐へるぞこいつは。

パンチ そら、今度は耐へられねえつて奴だ。ごうだ。(叩きのめしてしまふ。) 役人なんて奴はかうしてやるに

限るんだ。

(巡査が来る。)

パンチ おい大將、今何時ごろだい。(叫ぶ。)

時間が知りたきや、

お巡りさんにきいて見ろ。

巡査 時間か。よし、教へてやる。いま恰度貴様が牢へはいる時間だ。

パンチ あ、もうそんな時間ですか。いやだ。いやだ。牢へ行くのはいやだ。

巡査 本官は、貴様を牢へ放り込めどいふ、命令を受けてゐるのだ。

パンチ ところが、本官は、貴様を張り倒せどいふ命令を受けてゐるんだ。(巡査を殴りす倒。役人と絞刑吏かはいつて来る。) あゝ大變だ、へえ、へえ、どうもそんな事もない事をいたしましたして、(二人はパンチを捕へる。)

獄中のパンチ

(絞刑吏が出て来る。)

絞刑吏 さあ、パンチ先生、こゝへ來なさい。首を絞めてあげるから。今日はとても忙しいんだ。早くして
おくれ。

パンチ いやです。いやだ。いやだ。(絞刑吏はいやがるパンチを引張り出す) おお痛い、おお痛い。足に棘がさつ
て、わたしは、わたしは歩けないんです。

絞刑吏 あゝ、いゝとも、いゝとも。いま直ぐもう決して歩かないでもいゝやうにしてやるから。さあ、遺
言状は出來てゐるかね。

パンチ 遺言状なんか作つてゐません。

絞刑吏 それは困る。遺言状が出來ないうちは刑を執行する譯にはいかんことになつてゐるんだが。

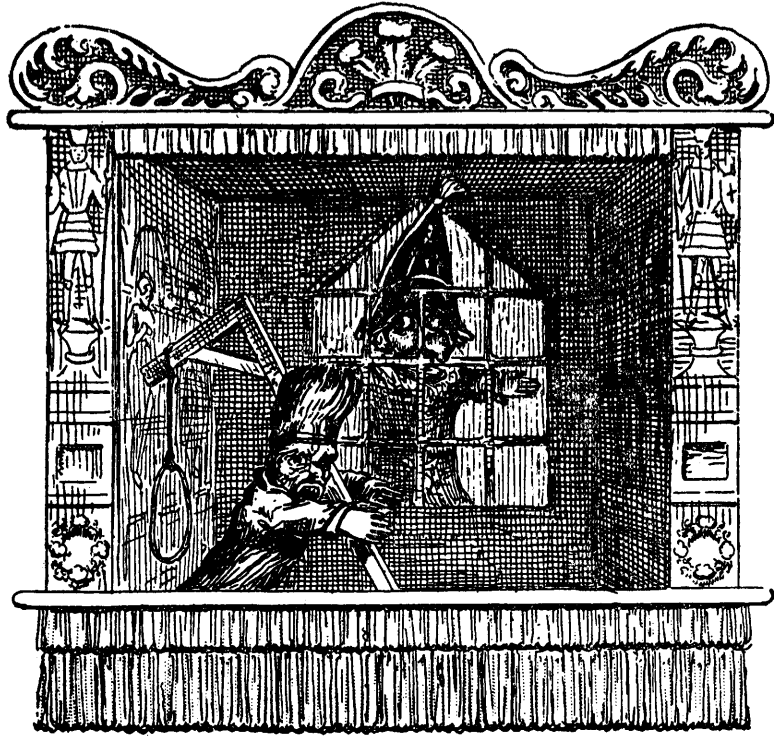
パンチ あ、左様ですか。それぢや、わたしは遺言状を作らん事にしますから。

絞刑吏 馬鹿いふな。さあこの中へ首を突込むんだ。(絞索の輪を指す。)

パンチ こゝでござんせうか。

絞刑吏 いや、もつと上だ。

パンチ こゝでござんせうか。



絞刑吏 さあ、パンチ先生、

此處へ来なさい、

首を絞めあげてあげるから。

今日はとても忙しいんだ。

早くしておくれ。

パンチ いやです。いやだ。いやだ。

.....

おお、痛い、おお、痛い。

足に棘がささつて。

わたしは、

わたしは歩けないんです。

絞刑吏 いや、もつと下だ。

パンチ こゝですか。こゝですか。こゝですか。(首をガタへ廻して突込むが、輪の中へは決して入れない)

絞刑吏 そこぢやない。そこぢやない。そら、そつちぢやないか。頓痴氣。

パンチ へえ、頓痴氣かも知れませんが、わからない譯ですよ。首を吊られるのは生れ落ちてから今日が始めてですからね。

絞刑吏 さうか。それもさうだな。よし、よし、ぢや教へてやらう。いゝか、よく見ておけ。いゝか、こゝ

して、この輪の中へ首を入れるんだ。(輪の中へ首を入れる。)

パンチ へえ、そんな事をするんですか。そこで、旦那が、かうして繩を引張らうつて譯なんですな。(繩を

引いて、絞刑吏を絞め殺す。)へい、何の事だ。譯はねえや。何しろ、かういふ事をやりつけてゐる旦那の事ですから旨えもんだ。へつ、絞刑吏なんか、かうしてやるに限るんだ。(唄ふ。)

何て間がいゝんでせう。

さあ、われと思はんものは、ごいつでもやつて來い。矢でも鐵砲でも持つて來い。

(幽霊が出る。)

幽霊 ぶう、うう、うう。

パンチ やあ、たた、助けてくれ。又、例の大仲よしがやつて來た。あつちへ連れて行つてくれ。あつちへ

連れて行つてくれ。

幽 靈 ぶう、うう、ぶう、うう。

パンチ おい、た、頼むから日本語(譯者註、英語國なら英語、佛語國なら佛語。)でやつてくれ。

幽 靈 俺は日本語を知らないんだ。俺は外國人だ。俺はあの世から來たのだ。

パンチ へえ、遠いところからお出なすつたもんだね。歸りの切符を持つてゐるのかね。一體何の用で來たんです。

幽 靈 俺はパンチといふ男を迎へに來たんだ。今日死刑になつた男だな。

パンチ ああ、さうですか。そんならさうと早くさう云つて下さればいゝのに。その男はあすこにゐます。

(絞刑吏を指す。) さあ、連れて行つて下さい。早く連れて行つて下さい。わたしはあんな奴に用はないんですから。

幽 靈 や、どうもありがたう。お世話様で。

(幽靈は絞刑吏と連れて行く。)

パンチ やあ、左様なら。あばよ。(大喜びではしゃぎ廻る。) コック、ア、ドウドル、ドウ。幽靈なんか、あゝして追拂ふに限るんだ。さあ、みんな行つてしまつたぞ。敵の奴等を片つぱしから一人残らず片付けてやつたぞ。これで、俺も枕を高うして、高野で餘生が送れるといふもんだ。さて、そこで俺も休むとすかあ。では左様なら、坊ちゃん、嬢ちゃん、左様なら。みなさん御機嫌ようお休みなさいませ。左様なら。

——これでおしまひ——

譯者のあこがき

本 田 満 津 二

いま、皆さんがお読みになつた「パンチとヂュデイ」の脚本は誰の作であるか私は知りません。"a Treasury of Plays for Children:— ed. by Montrase J. Moses."の中から拾ひ出したものです。

パンチの生涯は、世界中どここの國でもこれと同じ筋を辿つて演出されてゐるといふわけではありません。何しろ、日本でよく露路の出口などで見かける館屋さんの紙芝居のたぐひからあるものですから、その筋も即興的で、巧に時局を取入れた、場當りの多い皮肉なもので、千差萬別といふわけです。だが、まづ各國とも荒筋は大體似たり寄つたりで、この脚本などは典型的なものとも見ても差支ないと思ひます。

この脚本は、ジム・クロウといふ愛すべき黒ん坊の出で來るところは、いかにも亞米利加出來らしい特色があります。時代により、國により、現はれて來る人物は一樣ではありません。パンチとヂュデイ夫妻は、もどより缺くべからざる主要人物ですが、赤ん坊や小犬や、巡查、死刑執行人、悪魔又は幽霊などは、大抵いつも仲よく一座してゐるものであります。

さて、大事な主人公のパンチ君ですが、この男の身元を簡單にお傳へいたしませう。何しろ人の噂の聞き書程度のものでですから正確なことはお請合いたし兼ねます。専門家でない私ですから、まづ常識としてお覽願ひます。

わが愛すべき英雄パンチ君は何時この世に生まれて來たものか、正確なところは一寸わかりません。只、

親愛なるハアレキンやスカラムウシ等の兄弟であることだけは明瞭ですから、如何も羅馬のバアレスクの道化役者を雛形にして創造されたものらしいのです。近來發掘された羅馬時代の埋藏物の中にあつたマツカスといふ道化役者のブロンズの像が、バンチ君の釣つ鼻や、帽子掛のやうに飛び出た顎や、ごんぐり眼にそつくりだつたといふことです。

このマツカスの後裔であるいたづらもの、バンチが始めてこの世にそのグロテスクな姿を表はしたのは、千六百年頃の伊太利でした。それから英國へ渡つて、ごも角もこの醜男の爲めに劇場が建てられたのは千六百八十八年でした。彼の、人道を無視し、公序良俗を亂し、聖なる神を瀆し、國法を蹂躪する傍若無人の生涯は、この時からはじまつたものです。妻のヂユデイも迎へられ、赤ん坊も生れ、幽霊や悪魔も、それから時代の變遷と共に、彼の罪惡をますます光輝あらしめるに都合のよいいろいろな登場人物が生れ出て來たものです。

中世紀の、所謂演劇の暗黒時代に於ける劇場は、彼の獨占であつたやうです。その頃のバンチは、今日吾々が見る「バンチとヂユデイ」のやうに、限れた舞臺のみでは満足してゐなかつたやうです。あの顔で、あの肢體で、深刻な悲劇でも、神聖な宗教劇でも、皮肉は政治劇、社會劇でも、手あたり次第やつたものです。だが、何を演じてもわがバンチ君は、極惡非道な暴君でした。

神出鬼没とでも云ひますが、彼がこの世に出て來てから今日迄、二百數十年の間、世界中の殆んばあらゆる國々の少年少女の最も愛すべき友人として、倦かれもせずその罪惡の生涯を繰り返してゐます。伊太利のブルシネルラ、佛蘭西のギニョオル、獨逸のハンス・ヴルスト、西班牙のドン・クリストヴァル・ポリ

シネロ、土耳其のカラゴツなどは、みんなこの英米のパンチ君の分身であります。だが、何處の國へいつても、何と名が變らうと、パンチは何時もの「パンチとデュデイ」の脚本に見るやうに、妻を虐殺したり、頭はない赤ん坊を遺棄したり、お上の役人にお手敷をかけるの上騙し討ちしたりする手のつけやうもない極重悪人であります。

活動寫眞が教育上有害であるといふ理由で、小さい可愛いお客さん達を映畫劇場から塞ぐことは、何處の國でも同じ事です。子供に見せてやりたいものだけに、活動寫眞は見せていゝか悪いかと、各國でそれぞれ頭を悩ましてゐるのです。しかし、それは、活動寫眞に始まつた事でもなし又かういふ事は今日に始まつた事ではありません。中世紀の宗教政治家は舞臺劇さへ全然驅逐してしまひました。それを、氣むづかしい坊さん達に如何取人つたものか、役者に代つてこの時代の歐洲各國の舞臺を獨り占めをしたのが、このいたづらもののパンチであります。その上、このパンチが、この脚本に見るやうな、不徳義な殘酸な、反宗教的な、したい放題をしてゐるといふ事は何といふ皮肉でせう。宗教政治の爲め私生活から嗜好まで、十重二十重に縛られてゐた中世紀の民衆の潜在意識が、嘘いつわりなく曝け出されたところは非常に面白いことだと思ひます。しかも、この沒義道な極悪人を今日迄二百數十年の間、可愛い小供達の無二の友達として檢閲もなしに愛撫し生存せしめてゐる事は實に不可議といふべきであります。

私は何時でもさう思つてゐます。パンチは實に不思議な男です。この悪人を、如何して、小供だけでなく大人まで、これ程愛してゐるのでせうか。今日でも、人形芝居といへば第一にパンチを代表者にする位人氣のある男です。何故にあんなに人氣があるのでせうか。考へれば考へる程、大きな面白い問題であります。



左から ポリシネル、カサンドル、ピエロ。〔デュランティ畫、幸子寫〕

教師のポリシネル

本文は一八六四年巴里發行の“*Marionnetes du Jardin des Tuileries*”中の一章である。

デュランテイ作

鳥居幸子譯

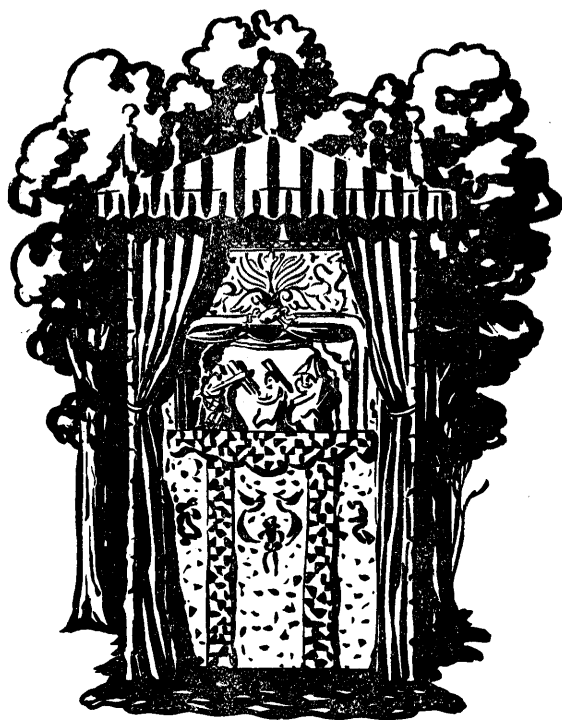
登場人物

カサンドル。ピエロ。ポリシネル。

アルキヤンの憲兵。悪魔

舞臺面

廣場



チユレリー園の人形芝居

カサンドル　せがれや、お前はいつまで立つても馬鹿だらうよ！

ピエロ　この父にしてこの子ありです！

カサンドル　お黙りなさい、無禮者！

ピエロ　みんな僕のことを馬鹿だと云つてゐる！　それはお父さんのせいです！

カサンドル　さうだ、お前には何も覺えられない。お前せめて二と二で幾つになるか知てますか？

ピエロ　二と二はなんにもなりません。

カサンドル　なんだとお云ひかい？　それは五じやないか；　少くとも三じやないか；　いゝや四だ；

ピエロ　何故？

カサンドル　なんだと、何故かとお聞きかい？　わしにそれが解りますか、わしに！

ピエロ　それ御覽なさい！　お父さんだつて僕より知つてゐるわけでもないじやありませんか。

カサンドル　悪戯者！　無論わたしは何でも知つちやゐない、だがお前よりは教養があるよ！

ピエロ　女料理人は何故お父さんに綴りを教へてやるつて云つてるんですか？

カサンドル　あれは馬鹿だ、そしてお前は無學なんだ！

さあ出来るなら、月とは何であるか話しておくれ？

ピエロ　そりやチーズです(註||オランダチーズが球状をしてゐるからであらふ)

カサンドル　チーズ！　あゝお前は無學でわしに恥をかゝすつもりなのだ！

ピエロ　ぢやあ！　一體何です？

カサンドル それは風船だよ。

ピエロ お父さんは行つて御覧になつたのですか？

カサンドル いゝや、馬鹿やらう！ だがそれはわかり易いことじゃないか。チーズは空中に浮ぶことが出

来ないが、風船は：

ピエロ では！ 月は何故光つてるか御存じですか？

カサンドル ちやお前は、お前は多分知つてると云ふのかい？

ピエロ えゝ、それは豆ランプがつけてあるからです。

カサンドル 故に、それは風船だよ！ あゝ！ わたしはお前に博識で正直で、お前の厚ぼつたい海綿のや

うな脳みそに、自分の學問を滲込ましてくれるやうな教師を見つけてやりたいものだ！

ピエロ 先づ御自分から滲込ましたらどうです！

カサンドル お黙りなさい、下らない奴め！（ポリシネル入場）あそこにちやうど、いゝ顔をした見なれぬ人

がやつて来た、この人にもしや教師を知つてないか聞いて見やう。

（ポリシネルはカサンドルに會釋する。ポリシネルも會釋をしやうとしてカサンドルの脊中に鼻をぶつける）

ピエロ おゝ！

カサンドル 氣をおつけなさいつたら、愚者！（會釋しつゝ）貴方！

ピエロ （會釋しながら）貴方！

（同）——貴方！

(同) ー貴方！

(同) ー貴方！

(同) ー貴方！

ピエロ (カサンドルの頬を平手で打ちながら) ーお父さんの鼻の頭に蠅がとまつてゐます。

カサンドル 悪戯者！ 静かにしなさい！

ポリシネル この若い青年は大層幸福そうな顔をしてゐます、これは貴方の御令息であることは、よく解り

ます、貴方、御令息は非常に似てゐます。

カサンドル あゝ！ 貴方、これはわしのせがれです、だがこれは馬鹿なのじゃ！

ポリシネル それは結構です！

カサンドル 何ですと、それは結構だと？

ポリシネル この青年は決して智を失はないでせう。

カサンドル さて、貴方、こういう境遇なのです、これはわしの相續人だ…この子は非常な金持になるのじや。

ポリシネル あゝ！ はい大丈夫！ わしはこの子に大變に興味を持つてゐます、この若い青年に。もうこの子が好になつたやうです！

カサンドル わしは非常に困つてゐる。わしはこの子に、この子を利口にさすことの出来るやうな教師をつけてやりたいのだが！

(ピエロ顔を振る)

ポリシネル それは好いお考へです… で、たんと給料をやるおつもりですか、その教師には？

カサンドル おゝ！ 貴方！ その人の望み次第、もしわしのせがれを才人にしてくれさへすりや！

ポリシネル もつと明確に云つて下さい！

カサンドル 机と、家屋と、六〇〇枚の古銀貨と、祝儀と、賞與と、補助金と、贈物と、剩餘金と… あ

ゝ！ 貴方、誰か教師を知つてゝ呉ればいゝんだが！

ポリシネル わたしは一人知つてます。

カサンドル ほんどですか？ おゝ！ その人の番地を教へて下さい！

ポリシネル それはわたしです！

ピエロ 君かい？

ポリシネル そうです、そうです！…

ピエロ 君は酔つぱらひみたにい赤いじやないか！

カサンドル それは健康と道徳による赤さなのだよ。

ポリシネル わたしはこの子の教育を負擔します… お前の名は何と云ふのかい？

ピエロ ピエロ。

ポリシネル それは吉兆な名だね… ピエロ、ピエロ、ピエロ！

カサンドル それでは、貴方、貴方はこの六づけしい日課を引受けて下さるのじやな… せがれは二十五な

んだ！

ポリシネル それじや御介息は驢馬である筈はありません、驢馬はこの年まで生きてはゐませんからね。

カサンドル 前もつて云つておくが、この子の頭は遅鈍じやよ。

ポリシネル ふふん！ わたしはその頭を割つてやりませう！

カサンドル 貴方はその頭を割りなさるご？…だが…だが…

ポリシネル それはつまりまあ、その頭を和らげやうといふ一つの云ひ方なのです！

カサンドル おゝ！… まあよかつた！… さて！ ではせがれをまかせましたよ、貴方！

ポリネネル よろしい！ ちよつとの間にこの子が従順であるかどうか試して見ませう、ピエロ、棒を持つ

ておいで！

ピエロ はい！（二本の棒を持つて来る）

ポリシネル お前のお父さんの頭を強く打ちなさい！

ピエロ はい！（カサンドルの頭を打つ）

カサンドル 一體どうしたのじや、貴方、これは何の意味なのじや？

ポリシネル 御覽なさい、この子はもう従順になりました！

カサンドル せがれを利口にして下さい！

ポリシネル 一寸の間に、貴方はそれについて御意見を述べて下さい！

カサンドル それからお前は、ピエロや、この先生のいふことをよく聞くんだよ。先生の御意見でお前の脳

みそを一杯にするんだよ。(カサンドル退場)

ポリシネル わたしの若い友達、直ぐに日課を始めませう！ 先づお前はわたしと、お互に君僕で話してくれ、解つたかね？ わたしはお前のお友達なんだから！

ピエロ 僕は何處かへ行つたほうがいゝ、なあ。

ポリシネル 第一の務めは従順です。(ピエロを打つ)

ピエロ あれい！ これが日課ですか？

ポリシネル 愚者！ も少しゝたらお前はわたしに感謝するだらうよ、そしてお父さんよりわたしの方が好きになるだらうよ！ 今の所、わたし以外の人の云ふことを聞いてはならないのだ。お父さんがお前に教へにやつて來たら、散歩にでもやつておしまひなさい！

ピエロ そんなこと覺えたり、したりするのはちつとも六づけしくありません。

ポリシネル 大變よろしい、大變よろしい、續けなさい、わたしの友！ お前地理を知つてゐるか！

ピエロ 知りません！

ポリシネル おゝ！ それは六つヶしいことはありません、突差の間に教へてあげやう。

ピエロ 僕はそれが知りたいのです。

ポリシネル 街とは何ですか？

ピエロ 知りません。

ポリシネル 悪戯者！ 街とは尖き當りにいつも一軒の居酒屋のある一つの道です。

ピエロ あゝ、なあんだ！

ポリシネル 居酒屋とは何ですか？

ピエロ 知りません。

ポリシネル 何だけちくさい！ この子はちつとも優れちやぬない！… 居酒屋とは好い酒を飲んで、朝から晩まで楽しむ場所だ。そこへは二本の足で入つて、さか立ちして出てくるのです！

ピエロ いゝ所だなあ！

ポリシネル 町とは何ですか？

ピエロ 知りません。

ポリシネル 町はお腹が空いて喉がかはいた時に、何でもほしいものを隣の家から取りさへすりやいゝ市場なのです… お前は今まで云つたことをみんな覚えておくのだよ！（ピエロを棒で打つ）

ピエロ おゝ！… はい、はい！…

ポリシネル さあお前は地理を覺えたから、これから、算術を教へてあげやう！

ピエロ 棒で打つてどうするか、打たずにですか？

ポリシネル それはお前の勉強次第です。さあ、聞きなさい！… お前がもしお父さんから四サンテム取つ

たどすると…

ピエロ よろしい！

ポリシネル そして伯父さんから六サンテム…

ピエロ よろしい！

ポリシネル それで幾らになるか？

ピエロ それで二人の盗まれた人になります。

ポリシネル それで葡萄酒と、挽肉ひきを買ふだけがあります！

ピエロ あゝ！ そうでしたね… ちつとも気がつきませんでした！

ポリシネル これは寄せ算を結びつけたものです。これからお前に、掛け算と、割り算と、比例法を一時に
教へてあげやう…

ピエロ 比例法!!!

ポリシネル お前はお父さんの事務用机からお金を取るとする…

ピエロ はい。

ポリシネル 伯母さんの地下室から葡萄酒の籠をかっぱらふとする…

ピエロ はい。

ポリシネル それからお前の従兄から時計をはづしとする…さあこれで三つの計算だ。わたしたちはこ
れを三つに分ける、そしてわたしは二つとする！

ピエロ いゝえ、一つ半！

ポリシネル あゝ！ いたづらつこ、お前はわたしを馬鹿にしてゐたね！ お前は乳離れした時から算術を
知つてゐたんだ。さあ！ お前の教育はこれでお終ひだ。(ピエロを搦で打つ)

ピエロ おや！ では君は何故僕を打つのですか？

ポリシネル それはお前に勇氣をつけるためです。さあ、修身に移らう。聞くだらうね！（ピエロを搦で打つ）

ピエロ はい、はい！

ポリシネル 修身は、こうなのです、もし人が見なかつたら、出来るだけ盗みなさい！ 食べる時には、食傷なさい！ 決して他人にお金を貸すな！ 決して首を吊らせるな。お前が一番強かつたらば、勇氣を出しなさい！もしお前が一番強くなかつたならば、逃げなさい！…

ピエロ 占めた！ ヒヒヒヒ！

ポリシネル わたしはお前の勉強が面白くなるだうといふことを、よく知つてゐたんだ！ お前のお父さんはお前の頭は遅鈍だと云つてゐた！（ピエロを搦で搦で）さあ、お前は社會へ乗り出しても構はない！（ピエロを打つ）お行き！

ピエロ あれい！ 行きます！

ポリシネル お待ち、お待ち！ お前にはもう一つ學問が足りない！

ピエロ そうですか？

ポリシネル わたしは擊劍をやつてゐる！ 棒でなぐることの出来ないやうな人間じゃない。わたしはお前に、この最後の缺くべからざる課業を教へてあげやう。よく御覽！ 先づ棒を振り廻して…一、二、

三！ それこの通り！（ピエロを打つ）

ピエロ あれい！

ポリシネル (一言毎にピエロを打つ) 右手に。

ピエロ あれい!

ポリシネル 左手に。

ピエロ あれい!

ポリシネル 前に―後に―剣尖打ち―鋸打ち―廻り打ちと返し打ち。さあ、やつてごらん!

ピエロ おゝ! 僕はもう澤山だ!(棒を持つ)

ポリシネル さあ!(ピエロ彼を打ち損ふ)お生憎さま!(棒を受取りつゝ)さあ、朝寝坊の手なみを御覽ね:ねんね、

ねんね!(打ちながら)お捕まへ!

ピエロ それ!

ポリシネル お前のお父さんは狂氣するだらうとは思はないかい? もうお前は學科に實行を接合しさへす

りやいゝのだ。

ピエロ 僕はその方が好きです。

(カサンドル入場)

カサンドル さて! せがれは幾らか進歩したかね!

ポリシネル この子は小さい偉人です!

ピエロ 僕は擊劍を覺えたよ!(カサンドルを打つ)

カサンドル おゝ!

ピエロ (一言毎に打ちながら)——左手に、右手に、後に、劍尖打ち、ごごもかも!

カサンドル (捧をとり、ピエロをなぐつけながら) 悪戯者め!

ポリシネル 貴方はピエロがはしこくなつたとは思ひませんか?

カサンドル 教師様、わしは貴方を賞讃します……この悪戯者めはわしの肋骨に穴をあけてしまつた!

ポリシネル おゝ! この子はだん／＼とよくなるでせう。この若いものは!

カサンドル 教師先生、餘りにこの子の年以上のことは教へないで下さい!

ポリシネル 少しも御心配なさいませぬ。ルーソーも、ジャコーも、ペスタロッチも、わたしの側にあつて

は何者でもないのです。

ピエロ そら、ババ!(カサンドルを打ち損つて、ポリシネルを打つ)

ポリシネル これ! これ! 友よ、教師に對する尊敬は!

ピエロ 居酒屋へ行かうよ!

カサンドル 何だと! 居酒屋へ?

ピエロ 地理をやり(カサンドルを押す)

ポリシネル (カサンドルを再び押しつゝ)——地理をやり!

カサンドル 何ですつて?……だが……だが、教師様!

ピエロ 地理を。(カサンドルを打つ)

カサンドル いやはや!……貴方はわしを騙してゐる。お見せなさい、さあ貴方の免狀をお見せなさい、貴

方！

ポリシネル (カサンドルを打ちつゝ)——これです！

カサンドル おゝ！ これは恐ろしい不義だ！

ピエロ 地理！(カサンドルを頭で突いて、向ふへやる)

ポリシネル よろしい、わたしの友！(ピエロ一軒の家の戸をたゞく) さあ！ お前そこで何をしてるんだ！

ピエロ 僕は居酒屋へ行くんです。

ポリシネル そこは居酒屋かい？

ピエロ そうですとも。(戸をたゞく)

ポリシネル さあ！ それこの子の智慧は出て来たぞ！

ピエロ 僕は喉がかわいちやつた！ おい！ 居酒屋の主人の奴！

ポリシネル 何てちつぽけなピエリダんだ！

アルキヤン (出場しやうとしてピエロに突き當る、兩人とも、「おゝ！」)——何を給士致しませうか？

ポリシネル 飲物を呉れ！

アルキヤン (壘を持って来て)——さあ！ これがうちで一番好い飲物でございます。

ピエロ (壘を取り上げて)——おゝ！ おゝ！ おゝ！ おゝ！

ポリシネル こらつ！ 若者、お前に髭でも生えた時に先へ飲むんだ！

ピエロ あゝ！ 君はそんなこと教へてくれなかつた！

ポリシネル　いゝよ…　お前の進歩に免じて、わわたしはお前を咎めないでおこう！（被飲む）

アルキヤン　御兩人様、貴方がたはお飲みになりました、何卒、お拂ひ下さい。

ポリシネル　何だぞ？

アルキヤン　お拂ひ下さい！

ポリシネル　ピエロ、拂つておやり！

ピエロ　僕はお金を持つてないんです！

ポリシネル　お前の哲學で拂つておやり！

アルキヤン　さあ！　御兩人様、そのお金を？

ポリシネル　何の金だい！

アルキヤン　早くして下さい、畜生！　わたしは辛抱強くないのです！（あちこち歩き廻る）

ポリシネル　さあ！　ピエロ、拂つておやりつたら！

アルキヤン　わたしはおめいたちを逮捕さしてやる！

ピエロ　幾らだい？

アルキヤン　三〇フラン。

ピエロ　（アルキヤンを打つ）—さあこれだ！（ポリシネル笑ふ）

アルキヤン　おゝ！　大罪人め！（棒を取る—争ひ—アルキヤンはピエロを打ちのめす）これでどうだい、泥棒め？

ポリシネル　わたしは自分の生徒を保護してやらなきやならない！（アルキヤンを打つて、追拂ふ）

ピエロ おゝ！ 僕はへごくになつちやつた！

ポリシネル あゝ！ 實行は常に差支へが伴はないとは限らない…修養しなくてはいけないのだ。聞きなさい！ この居酒屋の主人めは、わしらが拂はないにも拘らず、わしらの財布を空にしてしまつたのだ。こんな時こそ比例法を應用して悪くはない！

ピエロ 待つて下さい、待つて下さい！ 僕お父さんの所へ行つて何か取れるものがあるか見て來ませう。

(ピエロ退場)

ポリシネル 何てチャームングな若者だらう！ あいつは餘りに有望だ、ほんとに！ さあ、あいつを助けに行かなきゃ！

(ポリシネル退場。—アルキヤンと憲兵登場)

アルキヤン 憲兵様、泥棒の奴らはこゝでわたしを打ちのめしたのです！ あいつらを此處で待ちふせて、下さい、あいつらを捕へて下さい。

憲兵 (太い聲で) 奴らは幾人か？

アルキヤン 二人！

憲兵 二人？ ではおれは隠れてみやう！

アルキヤン 然しそれでは奴らを捕へられないでせう？

憲兵 うんにや！ おれは奴らを眺めるんだ。それでおれは澤山だ！

アルキャン 然し、正義は商賣を保護しなければなりません。

憲兵 さあ！ 理窟を言ふな、さもないとお前を逮捕するぞ！

アルキャン おや！ お怒りにならないで下さい、わたしは貴方様をお助け致しますえう！

憲兵 有難う！ ポリシネルとじや餘り瘤をこしらへ過ぎる！ 隠れやう、その方がより安全だぞ、おれ達は細目に渡つて奴らを逮捕するんだ(兩人退場)

(ポリシネルとピエロ一枚の毛蒲團を持つて登場)

ポリシネル あさ、ピエロ、毛は高く賣れるよ！

ピエロ まだありますよ！(ピエロ退場)

ポリシネル いゝ息子だ！ こんな生徒を持つことは肩身が廣いと云ふものだ。あいつは出世するだらうな
あ、あの子は！

(ピエロ再び毛蒲團を持ち来る) お待ち、わたしが續いて行かう。(ポリシネル退場)

ピエロ 算術は立派な科學だ、確かに、そして特に有益だ！

(ピエロ退場。ポリシネル一箇のトランクを持つて登場)

ポリシネル あいつはみんな盗んできてしまふだらう、小さいならず者！

(ポリシネル退場、ピエロ鍋を持つて登場)

ピエロ ほら！ これこそ幾らかになるだらう！

(憲兵登場)

憲兵 大罪人！ 貴様は盗んでる、貴様は強奪してる。貴様は掴み取ってる！ おれは貴様を再三捕へるぞ！

ピエロ だつて、あなた、僕は先生から教はつた通りにやつてるのです。

憲兵 貴様の先生なんておれの知つたことじゃない、構ふものか、滅法界におれに同行せい！

ピエロ 何處へ？

憲兵 絞首臺へ！

ピエロ 絞首臺つて、一體何ですか？ 僕の先生はそんなこと一度も話して呉れなかつたのです。

憲兵 奴は間違つたんだ、違つた方法で！ 絞首臺は泥棒のいゝ友達なんだ、名詞的に言ふさね。さあ、行かう！

ピエロ 散歩に行つておしまひ！（憲兵の頭を打つ）

憲兵 （われに歸つて）—あゝ、無頼漢！

ピエロ （憲兵の頭を打つて）—絞首臺を見にお行き！

憲兵 （われに歸つて）—今度こそ、捕まへたぞ、見事に！

ポリシネル （登場して）—おゝ！ おゝ！ わたしの生徒が首をつられやうとしてる！ 繩の端までその儘にしておこう、もう長いことはないだらう！（退場）

憲兵 貴様は絞首臺へ行きたくないよ云ふのなら、絞首臺が今に貴様の方へやつて来るだらうよ！ 居酒屋の亭主さん、絞首臺を持つて来て下さい、何卒、おれがこうやつて悪人を押さへてゐる間に！（ピエ

口に向つて) 動くな! あゝ! こら! じつとしてゐないか!

ピエロ 憲兵さん、僕を離して下さい!

憲兵 もつての外! 断然!

ピエロ 僕は貴方のお望みのものを何でも差上げます!

憲兵 お黙り、大罪人! そんな資格もないくせに!

ピエロ 僕は貴方に哀願します!

アルキヤン さあ絞首臺を持つて來ました!

憲兵 さあ、若者! 自制して、ちよつとばかりの善意!

ピエロ おゝの先生! 僕の先生!

憲兵 さあ! この中へ頭を、をさなく! それでと、おれは貴様の最後のネクタイをしめてやらう!

ピエロ もうこれから致しません!

憲兵 もう遅いぞ! 餘儀なく!

(憲兵はピエロの首をつる)

ピエロ おゝ! おゝ! おゝ! おゝ! …

アルキヤン またいつか、ピエロ、借金を拂つてもらはうせ!

(アルキヤンと憲兵退場)

カサンドル (入場すゝ) — おゝ! おゝ! わしのせがれ!!! わしのせがれが首をしめられた! おゝお不幸

な父よ! お前は何といふ教師をあの子につけたのだ? あゝ! わしの哀れなピエロよ! わしはこ

のひどい奴めにお前の死に對する仇をとつてやるぞよ！

(ポリシネル登場)

カサンドル わしは貴方と相談しなくてはならん！

ポリシネル 相談なさい！

カサンドル 貴方の言語道斷な教育は、わしのせがれをあの高い所に導いてしまったのだ！

ポリシネル あそこであらうが外の所であらうが、それがどうしたと云ふのです？

カサンドル だがせがれは死んでしまったのですぞ！

ポリシネル あれはとても馬鹿だったのです！

カサンドル 貴方はひどい人間だ！

ポリシネル いゝえ！

カサンドル では貴方は一體誰です、では？

ポリシネル わたしはポリシネルです！

カサンドル 貴方は恐ろしいポリシネルだったのか！ このポリシネルに、わしは自分の息子の教育をまか

したのだ！… おゝ！ わしは自ら蒔いたものを自ら收穫したんだ！… だが貴様は、破廉恥漢！ 貴

様は今以後悔するぞ！（カサンドル捧をとる）

ポリシネル お静かになさるやう御意見します！

カサンドル いいや！（ポリシネルを打たうとして打ち損ふ）

ポリシネル わたしを怒らせないで下さい！

カサンドル いいや、怒られます！(同じことと繰り返す)

ポリシネル (カサンドルから棒を奪ひ) さあ！ おや！(カサンドルを打つ) おや！

カサンドル わたしは死んでしまった！

ポリシネル 全家族！ 奴らはわたしの爲に遺言をしておくべきだったに！

(アルキヤン登場)

アルキヤン おう！ 憲兵さん、こゝにもう一人の泥棒がゐます！

ポリシネル わしたちを告訴して、わしの可愛い生徒の首を絞めたのは貴様だな！… 外のものたちと一緒に
になつちまへ！(アルキヤンを殺す) これで、全部うまく行つた！

(憲兵登場)

憲兵 おう！ おう！ ポリシネルは怒つてゐる、逃げやう！

ポリシネル それで澤山だ、剛の者め！ ビエロの首をつつたのは貴様だな？

憲兵 いゝや、いゝや！ 大へんな！

ポリシネル 奴らと一緒にに行け！(憲兵を殺す)

憲兵 あれ！ おれは死んでしまった、こんなに低く。

ポリシネル トラ デリ デラ！ わたしはまた外の教育を始めやう。

悪魔 いいや！ ブルブル!!

(争ひ、悪魔ポリシネルは逃げ去る)

貴方がたのお子さんは、決してこんな下らぬ奴にまかせなさんな！ ブルブル!!

デュランチイの人形芝居

南 江 二 郎

鳥居幸子さんの翻譯寄稿された「教師のポリシネル」は、一八六四年に（一八八〇年に再版されてゐる。）巴里で發行された“Théâtre des Marionnettes du Jardin des Tuileries”にのせられた二十四種の人形芝居脚本中の一つで、“Poliichnelle précepteur”はその巻頭にのせられてゐるものである。この本は佛蘭西のギニョオル風の人形芝居の代表的臺本集として定評のあるもので、従つて之等の人形芝居にはなくてはならない主要人物がそれぞれに活躍する脚本。“La tragédie d'Arlequin”“Pierrot et le pâtissier”“Cosandre et ses domestiques”“Le miroir de Colombine”等を初めとして、ポール・マシフアランに依つて英譯されてゐる、“Les drames de Citeadysterium”等も、その目録中に見出される。

之等の脚本作者なる LOUIS EMILE DURANTY は、彼の人形の餘り優雅でもない、だが、古拙愛玩するに足る彩色石版刷の小さい挿書を作り、各々の脚本に勸善懲惡的な序文を添へて、當時、既にノーハンに有名な人形小屋を持つてゐたデヨルデュ・サンド夫人にこれを献じてゐる。

デュランチイの芝居に現はれる人物は、カサンドル、ピエロ、ポリシネル、アルキャン、コロンビース、カタクリテリユーム等であつて、イタリア假面劇から血を受けた代表的フランス人形諸君である。事實、彼等の喜劇的な「家の芸」は「職業喜劇團」の痛快極る道化芝居から、直輸入されたものである。

デュランチイはその著に次の如き面白い序文を寄せてゐる。

「鸚鵡返へしの聲、口笛、するごいクラリオネットの様な嘆聲、木と木と、かち合ふ、きつい響き渡る音、騒しい叫び聲と爆發的な聲、恐ろしい争闘、不思議に自由に現れたり消えたりする事、固著した様に動かぬ假面。粗野な荒々しい舉動、等々、之等の芝居に就いては物事が實際と比較して全然度外れである。大きいものが小さかつたり、小さいものが大きかつたりする事、住む事の出来ないやうな家、小人島にある様な小さい樹木、プロクラステイーズの寢臺の様な寢臺、顯微鏡で見ねばわからぬやうな小さい山、その癖巨大な壺、巨像のやうなリースバン、ポット、鐵砲及び劍、滅法界な傘、此の芝居の美しさで魅力を作り上げてゐるものは總て陰鬱の征服者である。」と。

第二帝政時代を通じてこれ等の芝居の上演されたデュランチイの小屋は、チユイレリースの園に立つてゐた。ナホレオン三世が住んでゐたチユレリースの宮殿は一八七一年の動亂に際して焼き拂はれた。然し今日も尚、お天氣のいゝ日などは、此處、即ちシャン・ゼリゼーの並木小路のあたりに、このデュランチイの流れをうけた者達の小屋があつて、群る幼いバリジヤンの魂をこごとく奪つてゐる。

バンチのやうに、三本の指で操り遣はれる之等の人形に對しては、今は「ギニョール」の名が興へられてゐる。然しデュランチイ當時に、ギニョールはその出生の市まち以外では未だ有名でなかつた。ギニョールはリヨンであの有名な人形師ローラン・モールゲに一つの型カクブを創造されたものだが、一八〇八年以後、彼は次第に前記のポリシネルの名聲を我ものとして、奪ひ取つていつたのである。

PETROUSHKA



ELENA Y. MITCOFF

ペトルシユカ

エレーナ、ミットコフ作

小林美彌子 譯

登場人物

ペトルシユカ。マトリョーナ(その妻)

巡査。農夫。陸軍士官。その馬

熊。

場所

ロシア或村の街道

ペトルシユカ や皆さん、今日は、楽しい祭りおめでたう！ 神様のお蔭でたうたう家が建ちましたせ。そりや可愛い、綺麗な建物でね、四隅が三本の柱で支へてあるツてどびツきり頑丈な代物なんです。そのう未だ屋根はありませんがね、雨さへ降らなきや、いっだつてかんからかに乾いてまさあ。家の周囲に垣根を造るつてので七つも穴を掘りましたよ——お隣の庭どうちどの境をちやんとしごかなきやね、それにうちの豚奴が他所へ行つやたまりませんからね。豚奴、ひよこひよこことび出さうものなら、きつど穴ん中へおつちるんできあ、で己が引つぱり出してやらなきやいつまで経つてもはまり込んでやるんで。穴がこんな役するからにや垣根なんぞもう造らなくつたつてねえ。

さて之より皆さんに女房マトリヨーナの事をちよいと申上げやせう。ま、奴がごんな代物だか見てやつて下せい！ ね、その顔と來たら皺だらけ！ 口ですか——そいつは何ですな、耳まで裂けてるつて奴です！ それに眼ときたら——片つ方だけがぎよろぎろダイヤモンドみたいに光つて、鼻の穴は片ちんば、上唇はがさがさだ。ちよつ、片ちんばに——けちんば——立ちんばか。

嫁入つて來た時ですつて？ そりやうんと荷物を持つて來ましたき！ そら小麥を七俵、麴包粉のしこたま入つた袋を七個。ね、いっでせう——いくらもつて來たつて別に税金はかゝりやしねえんですか。らな。それにあの腕輪！ あんな立派な、上等な奴にや一寸誰だつて手が出せませんせ。兎に角己がシベリアにゐる間に見た事もないつて代物なんだから。それに己らのもらつたあの送物、そりやまつさらの急須なんですがね、唯ちよつとその玉に疵と言や柄がないだけなんです。それから珈琲沸し、こいつもちよいとその飲み口がないつてんですがね、別に構ひませんや、口がなくなつたつて珈琲は出て來やせう、

へえ確かに出て來ますせ。

それからと、さうさう、まああの婚禮披露の宴！ お客がごつきり食つたの食はんのつて、とびつきり上等の小麥でこさへたスープ、そんな中に、小つぼけな麥粒が二ツきり浮いてるつて奴でさ。食べりや癢擧でもおこし相な饅頭。腸詰のフライ、不思議な事にあんな不味いやつをどいつも残さず、そつくりその儘、平げて了ひやがつたつけ、喉へもつめないで、まあまあ食へおほせたサラダ。マカロニどきたら、丁度何ですな、鴉が巢でもこさへるのに持つてこいつて奴でさあ、それにデザートの頃にや皆が皆、まあやつとこさでうんうん唸るの我慢してられた様な事でやしてね。

お次にマトリヨーナの事ですがね、あんなかみさんは見始めでさあ。奴に着物の裾をくけさせると、針目は細かで、牝牛なんざなかなかちつとやそつとで針目の間がくぐれないつてんだからね。それに麩包の造り方、そりやうまいもんですせ、何しろ御褒美丁戴した位なんだから。實に素晴しいんで、麩包をオウンから引つぱり出すのに馬奴がゐなきや駄目だし、その麩包をつけるにや特別誂への卓子ティブルがなけりやいけないつてんでさ。だが何より奴やつこさんの御自慢、村中評判のものは辯ホリツヂのこさへ方ですぞ。こいつはそのこつこつの塊になつてゐる、さうですな、中々斧でこつんとやつた所で割れつこはありやしません。

マトリヨーナ！ マトヨーナ！ ちよいと出な、そして此處に御出の皆さんに御挨拶だ、良いものを作るからな。

マトリヨーナ（現れる）何だよ、この祿でなし、呉れる物なんて、これつぼつちも持つてやしないくせに。

ペトルシユカ 何だ持つてないつて？ ようし今やるよ、こゝにあるから、(彼女をぶつ)

一つ、二つ、三つ――

マトリョーナ あゝあゝ、およしつたら、後生だから、あゝ勘辯してお呉れ！ 體中の骨が折れちやぶぢ

やないか！

ペトルシユカ 己はぶつてやるんだ、貴様がぐすぐぬかすからだぞ、皆の前で人をぼろくそに言やがるからだい！ さ、七つ、八つ、九つ――

マトリョーナ あゝあゝ、皆さん、この飲んだくれから私をお助け下さい！ お優しい方々よ、此奴の言ふ事は嘘八百です。此奴は私の御嫁入りに持つて來た物つて物はすつかりすつちまひやがつたのです、死んぢまへ、この懶け者！ 皆さん、こんな者の言ふ事なんか本當になさるな。わたしや一度だつてお前さんにたてついた事なんぞありやらないぢやないか。何だいこの飯みべ野郎！ お酒と言や夜通し飲んで、ぐうぐうぐうぐう大騒、お蔭で村の者が皆眠れやしないんだよう。晝は晝で人をぶつ。それに恐れ多くも主の日曜日、教會にや行かないで、娘の子どぶざけに隣村へ行く。それでも一度だつて他人さんに愚痴一つこぼされないんだよ、それと云ふのも可愛想にわたしや泣いて泣いて泣き暮して口も祿に動せないからさ。

ペトルシユカ 何、口が動かせないつて？ ぢや、よせ愚痴こぼすのは。でなきやいくらでもぶつぞ。(彼女をたたく)

マトリョーナ あゝあゝあゝ！

(巡查が棍棒を振り廻し乍らベトルシユカの後に現れる。)

巡査　こら、ベトルシユカだな、亂暴者奴！(ベトルシユカを棍棒でなぐる、と彼はマトリヨーナをたくのをやめる)ぎや

あぎやあわめいたり、ごなつたりしろ、皆さんに迷惑をかけて貴様はどうするつもりだ？　大馬鹿者、

女房がなぐりたきや家でやれ、何もこんな道の真中でしなくつたつていゝぢやないか。さあ拘留だ、牢

屋へ來い。

マトリヨーナ　あら、お巡查さん、ベトルシユカを引きたて、行かないでやつておくんないまし。ま、お

ほめに見て、勘辨してやつて下さい。

巡査　さあ、さあ來るんだ！(泣きわめくベトルシユカをひきたてゝ去る)

マトリヨーナ　あゝあゝ、ベトルシユカが牢屋へ連れてかれちやつた。あゝあゝ、私の可愛想なベトルシユ

カ！　まあ私はどうしたらいゝんだらう、可愛想な私！　あゝ神様が、へらず口をきいた私に罰をおあ

てなすつたんだ、ほんに罪深い人間だこと。ベトルシユカよ、お前さんは一體どうおなりだらう？　そ

れに私だつて年をとつて一人ぼつちになつちまつてからどうしやう？　この淋しい世界には誰一人私を

慰めて呉れる者もありやしないんだ。

巡査　(もどつて来て)　今度は又どうしたつてんだ？　何故泣いては溜息ついてるんだね？

マトリヨーナ　おゝ、お優しい貴方様、私をベトルシユカの所へ連れてつて下さい！　あの人は酒飲みです、

私をぶちました、又私の持ち物は何もかも取り上げて、つかひこんぢまひました、でもベトルシユカが

ゐなけりや、淋しくつて堪らないんです。ね、どうか私も牢屋へつれてつて下さい！　私は本當に喜ん

で参ります！

巡査 これこれ、お前さんを連れてくわけには行かんよ。拘留するわけにも行かん。お前さんは泥棒もしなきや、人に亂暴な事も言はなかつたぢやないか。誰もお前さんをば訴へる者がないんだからな。

マトリヨーナ (どなる) 何、私も拘引してくれないつて？ 牢屋へ連れていつてくれないつてんだね。この

悪黨！ 馬馬野郎！(彼をたく)

巡査 くそ、死んちまへ。何と云つたつて牢屋へは連れて行かん！ お前の様な鬼婆おたはまにさはるのも穢らしいわ。だがペトルシユカは連れて来てやらう、奴が又貴様をぶつて呉れるわ。

マトリヨーナ ありがとうございます、貴方様の御跡について参りませう、ありがとうございます、貴方様

の爲にお祈りして、蠟燭をおたてしときますよ、聖ニコラス様や聖イサク様にそれから……(彼女が彼を追ひ行くと共にその聲は遠くに消ゆ)

ペトルシユカ (入り来る) ふん、己がこの故郷ふるさとに歸つて来てからもう七年にもなるんだな。己は枯草積んだ船にのつてペテルスブルグへ行つたつて、それから枯草を賣りこぼしてその金ですつかり飲んぢやつた。

マトリヨーナの奴一人で淋しくなつたと見えて、己に不景氣極る手紙を書いてよこしやつた。ま、金釘流つて奴で三行程くねくねと書いてあつたんだがね、そんな書き振りの手紙でも己にはちんと讀めるんでさ。まあその文句がふるつてらあ、妾も豚の子も貴方様如何御暮くらしかと思ひ居り候。アガフオノヅナさん、スピリドノヅナさん、エルモレヨヅナさん、ニコレヨヅナさん、それに村はづれの老將軍の奥方アクリナ夫人が貴方によりしく申し居られ候。ださ。が近況は何だつたい？ 泥棒が這入つて我が

後家さんを盗んで行つたつてのか？ いやさうぢやない、その走りがきをつゞり合せて見りや、御留守に玉の如き男子生れ候。その立派な顔だち貴方にそつくりにて候。だつて。

ま、話はもごりて、そんな都合で一刻も惜しみ船にとびのり、二十等の軍馬にかけのり。

まあうまい具合に事がぐんぐんはこんだので途中でもちよいと道草喰つて所々の村に寄り道したがその時ぼつちやり肥つた娘の子と仲よしになつちまつてね、そいつ等はまるで眞赤な林檎みたいな頬つべたに、實れた苺みたいな唇してましたよ。それからそろそろ金儲けをしたんでさ、ごうしてつてまあ聞かぬが花。お金がひよつこりころがり込んで來たのをごうしてなんてそれな野暮な事聞くもんぢやございやせんせ。

農 夫 (背後のたれ幕の間からその頭をひよ、こり出して) 己らはお前に二十錢貸しがあるだよ(かくれる)

ペトルシユカ で先にも話した様にうんと儲けやしてね、そいつを貯めこんだんでさ、だが己にや借金なんてけちなものは一錢だつてねわんですせ。

農 夫 (再び現れる) 己はお前に二十錢貸しがあるだよ。

ペトルシユカ (彼に氣がくつ) ちえつ、どんでもねえ！ すつかり忘れちまつた。己は——とさうさうトラシブで賭をして百圓も儲け、たつた二十錢ぼつち損をしたつけな。

農 夫 己らに二十錢返せ。

ペトルシユカ まあ、良いこだからよ、黙つといで。今ポケットをさがして見て、直にお前に返してやるから。ね、皆さんこんな重い財布を持ち歩かなきゃならねえつて何どうるせえ事てせう！ ポケットん中

はお金で一杯、手も入れられないつて始末ですからね、手はいらないつてのに、どうして財布が出せ
まさあね。

農夫 二十錢返へせつてんでい！

ペトルシユカ おや、おやおや、お金をすつかりなくしちゃつた！ ポケットに穴があいてるぢやねえか。
(泣く) お、お、！ あんまりお金を澤山もち廻るからつてんだよ。重すぎて縫目が弱つちまつたんだ。
ポケットがすつかりほころびて、お金がおつこつちまつたんだよ。お、お、！ 己みたいに善良な正直
者がどうしてこんなに罰あてられるんだい？ 己は蠅一匹だつた殺した事はねえつてのに、蟻だつて蚤
だつて殺生した事はねえ、皆々長生きせよ、いくらでも己の上を這つてくれ、皆神様のお造りなされた
生き物だ、こんななまで思つてやつてる位だ。

農夫 (どなる) 己らは二十錢返してほしいんだよう！

ペトルシユカ 待て、持つて来てやらう。(立ち去り棍棒をもつて、農夫の背後にやつて来る) さあ之だ！ (彼をうつ) 一

錢、二錢、三錢——(農夫倒れる、ペトルシユカは彼を舞臺からなげおとす。そして樂し氣に言をつゞける) さて己には——

と面白おかしい日がつゞいたつて。踊つたり、歌つたり、それに今の有様と來たらすつかからん。己は
七十錢もつて家を出たがそいつを圓に變へて折角歸つて來たのに。

マトリヨーナ (現れる) そらそら、又歸つて來やがつた。馬鹿野郎！ 歸つて來たつて一人前に何も出來や
しないくせに！

ペトルシユカ お相憎様よ、だが己にや出來る事があるんだ、之さ(彼女をぶつ)一つ、二つ、三つ——

マトリヨーナ あゝあゝあゝ！

(ほかほかと馬の蹄の音。馬にまたがった陸軍士官現れる)

士官 (どもりの聲で) こゝ、こゝら、やめい！ やめい！ 何だつて妻をたゝくんであるか？

ペトルシユカ (ぶつのをやめる) 己の女房であるからであります。

マトリヨーナ ありがたう存じます、閣下！ 神様が手前を憐れみ、閣下をばおつかはし下すつたんです、
そうでなきや私はさつくにぶたれて死んぢまつてた所です。

士官 馬鹿者、余は貴様をこの罰により、兵營にぶち込むぞよ、覺悟をせい！ さあ行くんだぞ、行けい、
行けい！ (馬がペトルシユカを舞臺から押しやる)

マトリヨーナ おゝまあまあ、ペトルシユカが又連れてくれました！ ね皆さん あの人は私の持物をすっかり使ひ込んだまひました、夜中お酒を飲んで、晝中私をぶちました。隣村に行つては娘つ子とふざけました。まあ、でも皆さん、——お父さんも——お母さんも、ねあの人の事はうちやつときませうよ！ あの士官が屹度あの人を軍隊に入れて呉れるでせう。ペトルシユカは軍服をつけて、勇ましい軍人さんになる事でせう。(退場)

ペトルシユカ (出て来る) さ皆さん、我輩は兵隊ですぞ。タラ、ラムラム酒がボンボン一杯！ ウオツカも一杯——それで體中が燃えさうで、心がうきうきしてるんです。でもこう我輩がはしやぎ出すと云ふと奴等が我輩を營倉にぶち込むつて事になるんであります。そこで仕方なし我輩はじつと毎日毎日坐つたまんま考へ込むんであります。此處を出たらうんと飲んでやるんだ！ さね。で出ると早速飲む

んでさ。すると又營倉行きつて具合でこんな事が次々繰り返される。之と云ふのも皆あの山の神のお蔭
でさ。實際女子と小人とは養ひがたしだ！(マトリヨーナが出て来る) やい！ 貴様は又惡體つきに來やがつ
たんだな、さうだらう？(彼女をたたく)

マトリヨーナ あゝあゝあゝ！

ペトルシユカ 又人を牢屋へぶちこむつもりだな？ 七つ、八つ、九つ――

マトリヨーナ あれ、こいつ人をぶつて殺しちまひます！ お助け下さい、死にさうだわたしや死んぢまふ

よ！

(熊がうなり乍らやつて来る。ペトルシユカをとらへてつれて去る。ペトルシユカわめく)

マトリヨーナ あら、まあまあ、熊があの人食ちやつた！(巡查出場) ペトルシユカがゐなくなりました！

熊が食べちやいました！

巡查 や、おめでたう！ さあ之で皆仕合せだ。(二人抱き合ひ接吻を頬に交す。そして踊り廻る)

(士官が馬にのらずに出て来る)

マトリヨーナ 私はペトルシユカを亡くしました。熊が食べちやつたんです。

士官 や、之はめでたい！ 之からわし等は皆幸福になれるんぢや！(彼等抱き合ひ、接吻し踊る) トラ、ハ、ラ

ハ、ハ！ おぞれ、祝へ！ そら！ そら！ そら！

(皆歌ひ踊りつゝとび廻る)

—幕—

「ペトルシユカ」に就て (ミットコフ)

小林美彌子 譯

ロシア革命前、種々上演された人形芝居を見た人々は記憶してゐやうが、このペトルシユカの譯はその劇獨特の場面を表示したものである。之は實際人形使ひが使用した臺本の譯文と云ふよりもむしろ單にその型を示してゐるものと言つて差支へない。

ペトルシユカは別名 *Yanka, Petrovich* 又は *Peter Ivanovich* と云ひ英のパンチや獨のカスバーとは従兄弟同志と云ふ所だが彼は純ロシア人だ。その容貌は三人ながらよく似てゐる、常にせゝら笑ひを浮べた面、小玉の様にギラギラ光つてゐるその目。彼の鼻は長くて尖つてゐるがパンチの鸚鵡の嘴の様ではない。顎は尖つてゐる(カスバーのはさうでないが)そして頬は丸々して眞赤だ。三人共皆三角帽をかぶり、襟ひだの付いた衣をつけてゐる。

最初ペトルシユカ人形芝居の事が書かれた書物には千六百卅六年出版の *Atlas Or Teatry* 著、ロシア及びペルシア旅行記がある。演劇ははじめ、十七世紀頃ロシアに氾濫してゐた彼のヨーロッパとの交易と文化の潮にのりロシア全土に流れ込んで来た。でロシアには別に自國固有の演劇は發展しなかつた。イワン大帝統治の頃ロシアに移住して来たドイツ人達は人形使を供つてロシアに入り來つた、かくして演劇なるもの、端緒がロシアに作られたと云ふわけである。三十年戦争の間に *Spekulum* (この語はロシア化した) はモスコとノヴゴロツトにその本部を設け、次第に全ロシアの隅まで流れ込んで行つた。

こうして人形芝居は好評を博してゐるにもかゝらず人形使は存在して行くためにはあらゆる辛苦をなめなければならなかつた、と言ふのは、十七世紀代に於けるロシア教會はあらゆる形式の娯業——即ち、歌舞音曲、道化者の、極悪なる遊興ミを排斥してゐたからだ。それに又皇帝も同様之等のものに對しては冷めた態度を示してゐた。その結果十七世紀の中頃には旅廻りの香具師は稀になり遂にはその姿をひそめて了ふに至つた。けれども彼等の技術は極く僅かにからくもその存在を保持し得た人形使によりよく傳へられた。十八世紀、時に誤樂への束縛の紐は解かれ、人形使はユクレエや中部ロシアにその手をのばしてすんずん進展、繁榮して行つたのである、革命以來ロシアに於ける演劇はソヴェエト政府の熱心なる教育獎勵の目的の手段に用ひられるやうになつた、ペトルシユカー人形使も幾分かその爲に盡し熱あるソヴェエト支持者としての精神を大いに發揮してゐる。その新しい人形芝居の内に“*A Crack on the Nut*”と云ふのがあり、その劇中、*Petrushka* は絶えずその敵である *Bourgeois, Denikin, Kolchak, Wrangel, Taiterov* をけなしてゐる。

Petrushka Play はもともと十四景より成つてゐるが時にはよく短縮される事がある。どの場面にも新しい登場者が現れる——即ち、醫者、軍人、陸軍將校、紳士、ジプシイ、ドイツ人、トルコ人、アラビア人、ユダヤ人、ペトルシユカの妻（色んな名で呼ばれる）さては親友のフィリモシユカ、悪魔、犬、熊、その他色々の動物等々、主人公ペトルシユカ、その人は非常にユーモアに豊み、何事かにぶつかる度に格言を見つめる。彼の口にする冗談はよく野卑にかたむく。又滅法もないほら吹きで悪智恵があり生意義だ。彼は酒を好み、卑怯者だ、それに人殺しさへしかねない人間だ。但し嫌ふ事の出来ぬ人物である。*Petrushchik* 即

ち、人形使はその観客の人数や時と場合によつて異つた即興のセリフなど作つて用ひる。そのセリフの上手下手は人形使の伎倆次第である。對話中には韻をふんだ詩や小歌が含まれてゐる。このペトルシユカの長い獨白にもロシア原文では韻のふんである個處がある英譯は唯それを暗示したにすぎない。

Benois-Stravinsky-Fokine のバレエ「ペトルシユカ」(千九百十一年初演)に現れて來る主人公ペトルシユカが踊り子の愛を得るため黒人と相争ふと云ふエピソードはこの人氣ある人形芝居の内には描れてゐない。アラビア人もトルコ人も餘り顔を見せない、又踊り子は全然姿を現はさない。あのバレエに現れる青ざめたピエロツトの様なペトルシユカは操人形に出て來るあの元氣潑潑たる人物とは全然相反したものである。

西歐偶人劇臺本襍考

(一)

南 江 二 郎

は し が き

「マリオネット」と云ふ言葉の語源考に據つても明白なる如く⁽¹⁾、その語の母體となつた中世紀以前の「神聖なる演技」ステリウム・サクム「ministerium scenicum」及び中世紀に於ける「神秘劇」ミステリと⁽²⁾、伊太利及び西歐偶人劇とは、離すべからざる關係を有してゐたものである。之等の、所謂「神聖なる演技」を演じて、舞臺上に多くの「奇蹟」を表現し得た繰り人形が、如何に重要視されてゐたかは、一〇八六年に伊太利 Cluny の僧院長 Hughes に依つて、偶像禮拜の一對象としてその非を唱へられて以來、屢々、その難に會つてゐる事に依つても證明される⁽³⁾。が、法規と雖も人々に愛せられた此の習俗を全然根絶して了ふ事は出來ず、かへつて西歐諸國に於て擴張させると共に、教會堂の内部や、その附近の僧庵、埋葬地等に於いて再現した。また、演技者が生命なき人形なるが故に、宗教議會等に於ける演藝禁止の嚴然たる法規から、屢々、寛大なる取扱ひをうけた事も事實である。然しこの場合に於ける人形は、布教具として適用されたものか、普通俳優との合同演技に從つたものか、或ひは普通俳優の代用として用ひられたものか、等であつて、さうした「關係」に於ける宗教劇乃

至道徳劇、教訓劇等から、我が近松の淨瑠璃等に於ける如き、特に人形の爲に創作された臺本を選出する事は困難である。

また一面、その殆んど總ては既に大道藝人としての人形師の手に遣はれてゐるが、今も尙、彼等から常に主役的地位を興へられてゐるパンチ、ポリシネル、アレキン等の由緒深い「氏名」に據つて、彼等の一族が光輝ある伊太利文藝復興期に於ける「コメダヤ・デラルテ」とも、血統的「ゆかり」を持つものである事が了解される。然し彼等を、前者と比較するとき、「關係」と云ふ言葉が、より親しい複雑さを示す「ゆかり」と云ふ言葉に云ひかへられねばならなくなつた、と云ふその嚴然たる事實を、今も世界の一隅に健在なるそれ等の子孫の爲に推知するの光榮を有するのみである。彼等の祖先は、「コメダヤ・デラルテ」以後、類型的な笑劇、或ひは佛蘭西のコミック・オペラ等とも、また良き縁組みをなしてゐる。が、彼等自身の生來の本質的な素朴さが、それ等の血統的な荒筋のみを繼承するのみで、上演に際しては、時代と、その國特有の趣味風潮に適應させた「即興」を以つて補つてゐた。各國の普通演戯に許された「即興」は、獨逸に於いては十八世紀の後半期までその痕跡が認められる。然しそれ等のいづれの國に於いても人形ほど、後世に到るまで「即興の才能」におのれを委ねたものはない。なせなら彼等は民衆の中に發生し、或ひは融合して生れたものとしてその始原的本道を歩み續けたからである。且つ、歴史的にも地理的にも、生來のボヘミアンであり、コスモポリタンであつた人形は、「即興」に依ることが、時と場所にのぞんで、彼のエゴイズムを遁す點に於いて、エントランゼとしての世相に對する鋭い客觀的批評と誇張させた諷刺的洒落とを縦横無盡に飛ばす點に於いて、或ひは、好奇心の前には彼が如何に意志薄弱なる浮氣者であるかを示す點に於いて、……

等々それ等一切の條件のもとに最も便宜であつたかであらう。この場合に於ける「即興」は偶人劇臺本の重要な内容を構成する。しかもこの「即興」たるや變轉極りなきものである。かゝる場合、その「即興」を誘起させる「荒筋」たる「原本」に依つて、その内容をほぼ想像すべき事が考へられる。が、その原本すら、ピツシエル教授の考證に依れば、殆んど保有されてゐないし、後になつて書き記されたものは、原本とは餘程變つてゐる事が明示されてゐる。その間の消息を同教授にホルタイ著「浮浪人—Die Vagabunden」中の人形遣ひドレーエルの言葉に依つて證明してゐる。即ち、「人形芝居にあつては書物と云ふものがない。どの芝居も文學で記されてゐない。それらにあつては父から子へと遺し渡されてゆく一人が他の人から覚え込んで暗記する。そしてそれから全體の物語を歌で覚えて運んでゆく。彼等の誰れでも次の誓ひを立てねばならない。即ち、彼等からバンを奪ひ去る正統ならざるもの手に移らないやう、決して一行と雖も手記する事はしない。」と。しかも私達はピツシエル教授の所謂「原本とは餘程變つてゐる」その原本すら、どの程度まで純粹の偶人劇臺本として認め得べきかに就いて、その判別に迷ふのである。

従つて、今に到るまで傳統的に遺存されて來た偶人劇臺本を、先づこの雜考の最初に列記してみようとする私の爲には、中世紀以後の戯曲乃至劇的物語中、人形芝居化されたものの中の代表的なるもの、即ち、人形芝居化に依つて既にその定本ともみなされてゐるものを、こゝに採録する事が一番無難なやうに思はれる。

人形芝居「ドクター・ファスト」の獨逸に於ける人氣は十六世紀以後、元來、哲學的な思想への傾向と神

秘的超自然的な思想への性癖を持つてゐるこの國の全民衆に迎合されて、それ等の思想の最も風靡してゐた時代を通じて、あたかも我が「忠臣藏」の觀があつた。英國に於ける代表的人形パンチ君の存在も、その氏名が人形芝居と同意義に解されるほどの歴史を持つもので、既に一六八八年の革命後には、ウィリアム及びメリー女王の即位と共に、一層その名聲を發揮し、彼はデユデイ嬢を妻君に嫁り、二人の間に一子を設けてゐる。今に遺る脚本「パンチとデユデイ—Punch and Judy」はその血統を引くものである。又西歐偶人劇史は、伊太利からフランスに歸化した人形が、コミック・オペラ等の演出に據つてそのおしやれすぎた國民を喜ばせたばかりでなく、十七八世紀の氣まぐれな詩人の戯作の爲にも、その勞をいとはなかつた事を記録してゐる。劇詩人 Pilon が人形のためにもした滑稽歌劇 *La Place, My Jet, Carolet* 等もその一つに數へる事が出来るものである(六)。

然し、それ等のうちの最も代表的なものも、人形芝居の臺本として、書物として公刊され初めたのは極く近年の事で、篤志家がその少數の限定本を手にする事が出来るやうになつたのは、漸く十九世紀も半ば過ぎた頃からである。それ等の臺本の筋書が既にあまりにポピュラなものであつて、さうしたものの必要を認められないと共に、さうした臺本の蒐集は極めて特殊な事であり、且つ、ポピュラなものの通例として、その荒筋的臺本は代表的なものとも、極めて文學的價値の乏しきものであつた事、又、「民俗學」が「學」として獨立したのは極く近年の事であつて、その一資料としても採録されなかつた事、等の爲に、その公刊がおくれたと云ふよりもその必要を痛感させなかつた爲であらう。加ふるにそれ等の臺本は、荒筋は既に周知のものでありながら、前記ドレーユの言葉に依つても證明される如く、父子相傳の樂屋内に秘藏された

門外不出とも云ふべきもので、責任ある臺本としてそれを公刊する爲には、いささか馬鹿らしい困難が伴つたからであらう。然し現在ではそれ等の代表的な殆んど全部が篤志家の努力によつて研究され寫し出されてゐる。私は先づその篤志家のその努力に感謝したい。なせなら、それ等の歴史的考證研究が國民劇史の資料として、又、民俗學の一參考資料として、重要視されねばならない事は勿論であると共に、その臺本の内容がたとひ文學的價値に乏しきものであつても、大衆劇としての始源的本道を歩み續けて來た、傳統的偶人劇の臺本を代表するものとして、輕視する事は出來ないからである。

故に私は、デヨルヂ・サンド以後、意圖的に偶人劇の始源的本質をよりよく生ず爲に創作された、諸家の文學的價値ある臺本を紹介するに先きだつて、敢て、阿呆らしき者を表象すると共に、日本化された「ポンチ」の名に依つて、私達にまでも親しいバンチ君の活躍する、「バンチとデユデイ」等の臺本から、その紹介の筆を起さうとするのである。

註 1. 「民俗藝術」第二卷第四號所載「我が偶人劇の世界的地位と其特色(南江二郎)」中の「マリオネット語源考」參照。

註 2. 中世紀以後、ミステリーの名で廣く知られてゐる此の種の劇の中には、「奇蹟劇」(miracle)などの系統を引く文字通りの神秘劇を含む爲に、この語が「神秘」を表すギリシヤ語の「mythos」又はラテン語の「mysterium」と關係を持つやうに誤解され易いが、この語はラテン語の「演技」を意味する「misterium」(「misterium」は「mysterium」の誤り)と關係するものである。故にこの場合に於ける「ミステリー」は總ての「神聖なる劇」の總稱を意味するものである。

註 3. 一二一〇年には羅馬法王 Innocent がその罪を鳴らし、Trent の宗教會議の法令は彼等の大部分を教會から追放した。然しその爲に十六世紀以後、伊太利の人形は西歐に益々進出した。

註 4. 英國の「Punch」の語源考に就いては、Bunch と同類語の方言 Punch から來たものだ、などと云ふ諸説もあるが、それが伊太

利語の「Pulcinno」ヲチン語の「Puer」なる事は定評となつてゐる。フランスの「Pulcinella」や「Arlecchino」が伊太利の「Pulcinella」や「Arlecchino」である事は一目瞭然である。

註 5. ドミンゴス (Richard Pischel) 著「人形芝居の故郷—Die Heimat des Puppenstüchens」参照。英譯にミッドレット・タウニー (Midred C. Tawney) の「The home of the Puppet-play」あり、南江二郎の邦譯もある。

註 6. マリヤン (magin) の「歐洲偶人劇史—Histoire des Marionnettes en Europe」及びそれを踏襲した諸書、「マスク」所載のヨリツタ (Yorick) の「歐洲偶人劇史論」等。

註 7. 臺本を持出す爲に生じた面白い挿話もあるがあまり隨筆めく爲に省略する。

—

ゴルドン・クレエグをして、「英國の印刷界がかつて産出したもののうちで、最も喜ばしい一巻である。」と感歎これを久しくせしめた、有名なジョン・コリヤ (John Payne Collier) の「パンチとヂュデイ」の初版は一八二八年に、ロンドンの *Septimus Prowett* の手に依つて刊行された。

この人形パンチの詳細を極めた傳記編纂は、博識を極めたコリヤがその一切を集中させての専心努力を以つてしても、三年間を要したもので、彼はそれを彼の光輝ある名著「シエクスピア時代に至る英國劇詩史と王政復古期に至る舞臺年代記—The History of English Dramatic Poetry to the time of Shakespeare: and the Annals of the Stage to the Restoration」の中に挿入させてゐる。

このプロウエットに依つて刊行された「パンチとヂュデイ」には以上の貴重なる傳記以外に、その臺本と云ふべきパンチとヂュデイの對話も掲載されてゐる。尙且つそれに添へて、コリヤがその本文の初めに述べ

てゐる如く、「友人デョーヂ・クルイシャンク (George Crisshank) の援助に依つて、私達の演劇史の缺陷を
充す」爲に、同書伯の自書自刻による着色、非彩色の數多き舞臺畫を挿入してゐる。

クルイシャンクはこの臺本が如何にして出來上つたかに就いて次く如く述べてゐる。

「私は大道演戯『パンチとデュディ』のあらゆる舞臺面を寫し取る爲に、刊行者なるポロウエツト氏に約束して、そのすばらしい展覽の人形所有者兼上演者のアドレスを手に入れる事が出來た。彼は私が幼年時代からピチニと云ふ名で知つてゐる初老の伊太利人だつた。彼はデルリイ・レーンのコールヤードに於けるキングス・アームの印章を持つ下級公衆長屋に住んでゐた。上演を約束した朝、公共長屋の表窓は取りはづされ、パンチ劇場はクラブ室へと引き出された。記述をやる筈のコリヤ氏と刊行者と私は觀客となつた。さて芝居が初まり出すと、私は人形達をスケッチする爲に最も面白い場面に来るごとに靜止せしめた。その間にコリヤ氏は人形達の對話を書きとめた。かくてその總ては原型通りに寫し取られた。尙このパンチの上演者としての伊太利人によつて表現されたあらゆる場面の敘述は、今日、私達が見せられてゐる誰のよりも、最も優れて上手なものだつた。」

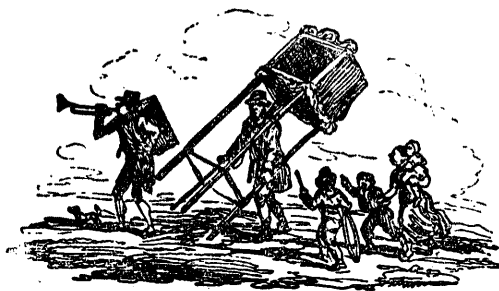
かくて、この臺本と挿畫は完成されたのである。その臺本即ち對話の内容に就いては、荒筋だけは既に周知のものであり、早晚、私もこの臺本に依つて、その對話の翻譯と挿畫を紹介するつもりだから、ここには紹介を略する。

ただ、この名著は、その後、幾度となく重版されてゐると共に、そのいづれも、限定の稀觀本に屬するものなので、その刊行年表を次に紹介しておく。

先づ再版は初版と同じ一八二八年になされてゐる。その節、本文の補充増頁が行はれた。その後、十數年間は重版されなかつたが、一八四四年に到つて、テッグと云ふ出版者に依つて第三版が刊行された。以下次の通りである。

3. Teeg, London, 1844.
- 3a. Teeg, London, 1856.
4. Thomas Hailes Lacy, London (1859), with new matter.
5. Bell and Daldy, London, 1870. Coloured Plates issued separately.
6. Bell and Daldy, London, 1873.
- 6a. Bel and Sons, London, 1881.
7. (Broodway Booklets) Routledge, London, 1905.
8. Nelson London, 1919.

——(未完…以下每號續稿)



「ババット・ショウ」の一座—クルイクシヤンク畫

片 斷 錄 日

郎 二 江 南

三月五日東京……先づ目的の一つなる結城の人形劇場第一回公演を見る。出しものには従来からもつてゐる「壺坂」と「女夫獅子」の外に、所謂新興演劇への進出として公開される「カリガリ博士」／＼宮尾氏「岡子串助漫遊記」が添へられてゐた。いづれも相當に面白く、人形でこれだけの演出が出来るのは、世界にこれを求めても稀有だらうと云つた感を今更ながら深くした。その意味に於いて結城の存在はともかく喜ばしい。然し、惜むらくは、人形があまりに寫實的に上手に動く爲に、ついその人形の寫實味に捕はれ勝ちで、それをもう一步踏み込んで、人形の始原的本質をよりよく生かさうとする念が甚だ缺けてゐると云ふ事だ。これは新興人形座に對して最も重

大な問題である。例へば人形劇化した「カリガリ博士」をその主なる演しものを選んだ點は最も賢明だつたと云ひ得るが、私は映畫「カリガリ博士」の縮圖（私はこゝでよりや體的な縮圖と云ひたいのだがこの言葉すら其繪畫的舞台裝置の偏重に依つて云ひ添へる事が出来ない。）を見せてもらひたかつたのではなかつた。結城の新人形は結城の持つ藝の上手さ面白さだけでも充分一般觀客の心を捕へ得るであらう。然し私は結城の藝の立派さを誰よりもよく知つてゐるだけに、それだけに止つてゐるのは惜しいと思ふのだ。全く惜しい。

翌日、吉右衛門の「法界坊」を見た。世話にくだけたこの演出振は面白い事に於いては天下一品かも知れない。然し今度で二度目である私には、何故か、初めて見た時ほど面白くなかつた。これほどうも變だ。播磨屋ほどの人の藝なら、見れば見るほど、味が出て來る筈だ。事實、私は東京の俳優中、播磨屋の持つあの「濫い持味」を一等好んでゐる。それなのに、このシグサの面白い「法界坊」に限つて……これは變だ。この場合「君は田舎者だから、何時も吉右衛門らしくないものを見せられたからだらう」と云ふ人があつたら、誠に御親切な御言葉であるがノシをつけて返上する。又私は上方人間だが、生世話ものの味が全然味へないほど芝居きらひでもない。まあ、かうことはつておいて、翌日見た、音羽屋一門に中車の加つた「先代萩」を、殊に刃傷の場に於ける六代目と中車の藝をほめておく。歸洛、二十二日に觀世宗家の「弱法師」を見る。大體に於いて所作と舞とは正しく、わざとらしい演技がなくて、可成よかつた。これが一番無事なのだ。「石の鳥居」でもシテ柱を杖でさぐらなかつた。それをした人ですつきりしてゐたのは私の知る限りでは櫻間金太郎だけだ。誰は殊に前シテで、もう一つこの作の眞意に理解を缺いてゐたやうに思つた。この日の地謡は可成よかつた。

清和四月に入る……

恩師坪内逍遙先生から、選集以後の作品集として特に近刊の御著「近世畸人傳、其他」を賜る。添書に「京言葉の間に合せさぞお笑ひと存じ候。餘りにをかききものおつでに御訂正を願ひたく……」とあつた。これは、藝術家の妻として、私を感歎と美望に狂はせた大雅堂の妻お町などの言葉に就て云はれたのだが、勿論、訂正の餘地などなく、先生からは孫にも等しき私へ……と思ふとなす術を知らなかつた。同著は家寶として秘藏してゐる。この喜びに溢れてゐる間に中勤助氏から「菩提樹の蔭」をいただいた。集中の作品はいづれも、「思想」に掲載されたもので、私は同氏の作品に接したい爲に同誌を買求めた事も一度や二度ではない。同誌を取揃へてゐる私はいづれも曾つて一讀したものであつた。然しかうして一つにまとまつてみると、餘韻凌々として、菩提樹の蔭に泉を見出した觀がある。世には隨筆と稱して雜感を綴り得る人は多い。然し眞の隨筆をものし得る人は稀有である。中氏の「しづかな流」はその稀なるものの一つである。加ふるに最近、佐藤春夫氏から贈られた色紙がある筆に染められた抒情詩の数々は、私が日頃、愛誦してやまないものばかりである。僅かながら愛讀の書も手のとどくところにある。お町には到底及ばなくても世話女房も來た。夫婦喧嘩の味もほんたうに解るだらう。日頃、貧乏こそしてゐるが、この心の貧澤には心からなる感謝と満足を感じてゐる。

五日、彫刻家のイサム・ノグチ君と紐育でエッチングをやつてゐると云ふハンドフォス君と共に金剛巖氏の能樂「采女」を見る。當日の面は天下「河内作の「孫次郎」と同作の「泥眼」だつたが、「面」そのものが持つ「位」にふさはしい演能振りで、近頃になくしつみり見た演能後、樂屋で秘藏の能面の數々を見せていただいたが、先きに

博物館の展覽で見たときとは違つて、一つ一つ手に取り上げる毎に名作の持つ氣魄のひしひしと胸に迫つて來るのを感じた。

映畫「モロツコ」を見る。初めてトリーキらしいトリーキに接したやうな氣がした。下旬、イサム・ノグチ君とハバード大學から遊學して來てゐるシュッター君に依頼されて文樂へ案内した。日蓮の六百年忌とかで「日蓮聖人御法海」をやつてゐたが、あまり面白くなかつた。それでも兩君には物珍らしさから面白さうだつたが私は有難迷惑だつた。せめて中の「堀川猿廻しの段」でもと思つたがそれは兩君の方で辛採してくれなかつた。



「パンチとヂュデイ」演伎—クルイクシヤンク畫

編輯後記



詩壇の碩學日夏耽之介氏と、ポードレルと同様に私が尊敬してゐる萩原朔太郎氏から、本號の巻頭を飾るにふさはしい玉稿を惠與され、事は喜びに耐えない。黄眠大人の書は、扉にのせたアナトオル・フランスの一文と對象されるとき、一層、その輝きを増すであらう。又、萩原氏の印象記は、曾つてゴーチエが土耳其の影響に寄せた名文と比較し得る唯一のものであらう。

加ふるに、我が最初のオニール戯曲紹介者として、また、近代劇の研究家として、私が常に多くの教示をうけてゐる本田氏から、傳統的偶人劇の世界的代表脚本とも云ふべき「パンチとヂュディ」の譯稿をいただけ、た事は本誌の誇りだといつて、い、だらう。若し拙稿を参照して下さつたら、一層、この脚本の價值が了解されると思ふ。續いて鳥居幸子さんの「教師のポリシネル」がある。これは鳥居さんがフランスに遊學中、苦心して蒐集された偶人劇の臺本中から、特に本誌の爲にこれを選んで寄せられたもので、挿畫まで添へられたこの原稿を受け取つた時は、その稀觀の初版を持たない私は羨望に燃えながらも、同好者として文字通り狂喜したものである。又、「ペトロシユカ」はポール・マクアランの名編著「偶人劇傑作集」にただ一つ英譯されてゐるものを、小林さんに願つて翻譯していただいたものである。最近「ペトロシユカ」の原書を得た。

本號の遅刊

本號の遅刊にも色々の理由があります、然しその最大原因は、豫告に「人形芝居・臺本・研究號」とした以上、單に、傳統的偶人劇の臺本・研究のみにとどめないで、所謂、その豫告の内容にふさはしいものに作り上げたかつたからです。それを充分になし遂げなかつたつぐなひは漸時してゆきます

人形芝居の本・其他

以士帖印社刊行の同著も色々の都合でおくれてゐます。原著者だけへ翻譯の許可を願つて版元の許可をとつておかなかつた私の手落も含むでゐます。然しそれは責任をもつて解決させますし、以士帖印社もどんな犠牲を拂つても刊行すると云つてくれてゐますから、著者が以士帖印社を信じてゐると同様に、同社を信じてあげて下されば嬉しいと思ひます。尙同著は實費參圓以上を要する由で、この上の負擔をかけるのは忍びがたいので「印度偶人劇考」はやもなく附録とする事を中止します。右不惡御了察下さい。尙、この申出の責任者は私で、以士帖印社の申出でない事を附言しておきます。

昭和六年五月廿五日印刷納本

非賣（定價壹圓五十錢也）

昭和六年五月廿八日發行頒布

本文及挿 畫の無斷 複製嚴禁	編輯發行所	京都市上京區小山下總町 南 江 二 郎
印刷所	京都市中京區柳馬場通御池上 吉 志 部 京 美 堂	
發行所	京都府龜岡町宇河原町 郷 土 演 劇 協 會	
	編者 穴版一六一九二番	

朱之介覺え書

- ▽水ぐるま、春信幻想詩四篇と浮世繪幻想詩一篇とロオランサンの繪によせたる詩二篇よりなる。序詩は佐藤春夫先生。
- ▽さしゑは、水ぐるまを木版に移し、一枚一枚手刷りにすること。限定数は買ひ入れたるいささかの帙用材料の數によつて決定すること。
- ▽尙マリイロオランサンの繪を挿入すること、本文の用紙は鳥の子別あつらへ色付、ロオランサンの繪の一つは支那古代白唐紙宣統帝の遺品を買ひうけたるものを使用。
- ▽インク色は？ 巴里製香水ローヤル、シクラメンを混入のこと。番號入り。
- ▽青葉の繁る前に作り上げた、石印は山田正平氏鐵筆堀口大學先生撰文の「待月西廂下」使用
- ▽製本は、下鳥大完堂を煩はすこと。



窓邊娘子
MARIE LAURENCIN

著 氏 郎 二 江 南
ま る ぐ 水 ・ 集 詩

回 一 第
介 之 朱 妖
版 く たい ぜ ・ 作 試
社 印 帖 士 以
版 春 幕

原 宮 牧 本 ・ 濱 横
也 圓 參 は 價 額

印度偶人劇考

特殊演劇叢書第一編 ● 定價貳圓五拾錢(書留 送料共)

● 人形芝居の故郷(全譯) — ピツシエル教授

舊伯林大學文學部長ピツシエル氏の『人形芝居の故郷』は印度を世界人形芝居の源地と推定し、これを立證せしめん爲に、印度古代宗教、演劇、文學、風俗の書は勿論、西歐諸國のものに至るまで、最も權威ある著作研究約百種を引用、考證したるものにして、其參照書目註だけでも世界的文獻である。(尙原書にもなき梵語の發音譯文を附す)

● 印度の人形芝居 — リツチウエー教授

ケンブリッヂ大學考古學教授にして古代希臘研究の權威なる同教授が、右記ピツシエルの考證を檢討して餘すところなきものにして、この兩書を併讀して、吾人が教示されるところは實に無限大である誠にこの一書を一讀せずして、世界の偶人劇史を語る事は許されないと斷言しても敢て過言でないであらう。

裝幀體裁：四六版。特製手漉耳附局紙。人形圖紋章すかし彫入り
配本期日：昭和六年六月廿日。內容：約百頁。稀觀插畫數葉挿入
編纂翻譯：南江二郎。本書は申込初版限定版とし、絶体に増版せず

翻譯者署名 ● 五拾部限定出版 ● 稀觀限定本

京電 都話 府龜 龜岡 岡九 町番 會協劇演土郷 振一 替八 口一 座九 大ニ 阪番

